

日暮遺跡発掘調査報告書

1989

神戸市教育委員会

正誤表

頁	行(番号)	誤	正
17	4	SB 02、10の	SB 05、07の
17	13	SB 04の	SB 03の
19	2	05の柱穴を	04の柱穴を
20	10	掘形	掘形
21	15	掘形	掘形
22	4	遺跡	遺構
22	10	掘形	掘形
22	13	掘形	掘形
29	27	188 ~	118 ~
30	8	環状土錘	管状土錘
34	—	—	36, 37 S = 1 / 2
47	73番	外画ヘラ切り	外面ヘラ削り
53	155番	環状土錘	管状土錘
54	156 ~ 168番	環状土錘	管状土錘
55	169番	環状土錘	管状土錘
55	175番	175番(重複)	176番
56	190番	190番	191番
56	191番	191番	192番
56	192番	192番	193番
57	12	(9)は	(7)は
57	18	(8)は	(9)は
57	18	コーナ部分	コーナー部分
57	18	多きさは	大きさは
58	1	(9)は	(8)は
58	2	(8)と	(9)と
63	26	ようある。	ようである。
66	4	(79)や	(239, NO. 80)や
66	22	環状土錘	管状土錘
66	23	倒鐘形	釣鐘形
67	5	(寛永遺寶)	(寛永通寶)

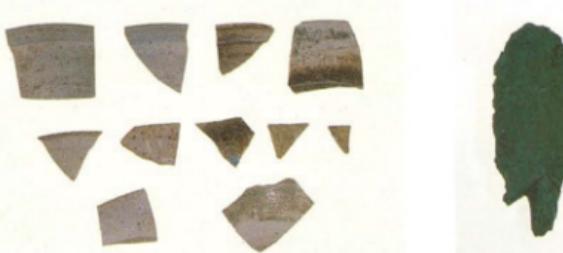


日暮遺跡出土綠釉陶器



同

上 ($S=1/2.5$)



灰釉陶器 ($S=1/2.5$)

銅鏡 (原寸大)

日暮遺跡発掘調査報告書

1989

神戸市教育委員会

序 文

神戸市では、市街地の再開発に伴い、近年とみに既成市街地内の発掘調査の件数が増加し、多くの遺跡が発見されています。しかし、これらの遺跡のほとんどは記録保存にされ、その姿を失っていきつつあります。

日暮遺跡も市営住宅建設予定地内で発見された、今まで人々に知られていなかった新発見の遺跡です。

このたびの調査により、このあたりが弥生時代から近代に至るまで、私たちの祖先が生活を営み、生産活動に従事した場所であることがわかり、新たに本市の歴史を明らかにする貴重な資料を得ることができました。

今回、調査を行った地区は遺跡の一部分でありますが、記録保存されることとなり再び見ることはできません。しかしこの記録が刊行されることによって地域の歴史を明らかにする上で、市民の方々や、歴史を学ぶ人々に、少しでもお役に立てば幸いです。

本遺跡の調査および本報告書の刊行にあたり、御協力いただいた関係各位に深く敬意を表しますと共に、埋蔵文化財について、なお一層の御理解と御協力を賜りますようお願いいたします。

平成元年3月

神戸市教育長

緒方 学

例　　言

1. 本書は、神戸市中央区日暮通に所在する「日暮遺跡」の発掘調査報告である。
2. この調査は、神戸市教育委員会が昭和61年10月20日から昭和62年1月20日にかけて実施したものである。
3. 発掘調査および本書の作成は、教育委員会文化財課学芸員、谷正俊が担当した。また、第V章の金属器の項は同課学芸員、千種浩が担当した。
4. 昭和61年度神戸市教育委員会事務局調査組織

神戸市文化財専門委員（埋蔵文化財部門）

野地脩左　　神戸大学名誉教授

小林行雄　　京都大学名誉教授

檀上重光　　神戸市立博物館副館長

教育長　　山本治郎

社会教育部長　　今治　勉

文化財課長　　増川修三

埋蔵文化財係長　　奥田哲通

事務担当学芸員　　口野博史　丹治康明

調査担当学芸員　　谷　正俊

5. 発掘調査および出土遺物の整理に際して、宮本長二郎氏（奈良国立文化財研究所 建造物研究室長）、山田清朝氏（兵庫県教育委員会 社会教育文化財課）岡泰正氏、森田稔氏（神戸市立博物館）の御指導をいただいた。

特に宮本長二郎氏には、平安時代掘立柱建物址の図上復元についての御指導をお願いした。また金属製品の分析は、奈良国立文化財研究所 埋蔵文化財センター遺物処理研究室長 沢田正昭氏、同室 肥塚隆保氏に依頼して行った。ここに厚く敬意を表する次第である。

6. 調査にあたり、神戸市住宅局の協力を得た。
7. 発掘調査・遺物整理には、佐伯二郎、山本大治、前中早苗、遠山育子、北野康子、畠谷敦子、大前厚美、西川紀子、奥さおりが参加した。
8. 遺物写真の縮尺は、約1/2.5に統一し、例外については註記した。

目 次

	頁
I.はじめに.....	1
II. 遺跡の立地と歴史的環境	
1. 遺跡の立地.....	2
2. 遺跡周辺の歴史的環境.....	3
III. 発掘調査の概要	
1. 調査の経過.....	6
IV. 遺構	
1. 基本層位.....	8
2. 検出遺構.....	10
V. 遺物	
1. 遺物の概要.....	25
2. 瞑褐色砂質土、竪穴住居址、竪穴住居址状遺構 上坑、ピット出土遺物	25
3. 褐色砂質土、掘立柱建物址、上坑、ピット 出土遺物	27
4. S D 0 1 出土遺物.....	30
5. S D 0 2 出土遺物.....	31
6. 金属器.....	57
VI. まとめ	
1. 弥生時代.....	61
2. 古墳時代.....	61
3. 平安時代.....	62
4. 鎌倉・室町時代.....	66
5. 江戸・明治時代.....	67
6. 結びにかえて.....	67

挿 図

	頁
図1 調査地位置図	2
図2 周辺遺跡分布図	5
図3 調査区地区割図	6
図4 調査状況写真	7
図5 断面土層図（東壁）	8
図6 断面土層図（南壁）	9
図7 古墳時代遺構配置図	10
図8 S B 0 1 平・断面図	11
図9 S B 0 2 平・断面図	12
図10 S X 0 1 平面図	13
図11 S K 0 1、P-1 1 1 遺物出土状況図	14
図12 平安時代遺構配置図	16
図13 S B 0 3 遺構配置図	17
図14 S B 0 4、0 5 遺構配置図	17
図15 柱材出土状況写真	18
図16 S B 0 6、0 7 遺構配置図	18
図17 S B 0 8、0 9 遺構配置図	19
図18 S B 1 0、1 1 遺構配置図	19
図19 S B 1 2 遺構配置図	20
図20 S B 1 2 遺構写真	20
図21 P-1 9 3 遺物出土状況写真	21
図22 P-1 9 4 遺物出土状況図	21
図23 P-3 2 1 遺物出土状況写真	21
図24 P-3 2 2 遺物出土状況写真	22
図25 皇朝錢付着植物種子顕微鏡写真	22
図26 P-2 6 遺物出土状況写真	22
図27 P-1 4 0 遺物出土状況写真	22
図28 S K 0 3、0 4 断面図	23
図29 S K 0 5 遺物出土状況写真	23
図30 S D 0 1、0 2 遺構配置図	24
図31 S D 0 1、0 2 断面図	24

図32 銅鑄尖測図	26
図33 天祐通寶拓影	31
図34 寛永通寶拓影	31
図35 暗褐色砂質土、豎穴住居址出土上土師器	32
図36 暗褐色砂質土、豎穴住居址出土上土師器	33
図37 暗褐色砂質土、堅穴住居址、土坑出土土師器、赤生土器	34
図38 褐色砂質土、ピット、土坑出土土師器	35
図39 褐色砂質土、ピット、土坑出土土師器、須恵器	36
図40 褐色砂質土、ピット、土坑出土須恵器、綠・灰釉陶器	37
図41 褐色砂質土、ピット、土坑出土黒色土器	38
図42 褐色砂質土、ピット、溝出土土錘、蜻蛉	39
図43 褐色砂質土、ピット出土瓦	40
図44 S D 0 1、0 2出土土器、陶磁器、石硯	41
図45 金属器尖測図	57

表

表1 出土遺物観察表	42
表2 延喜通寶螢光X線分析チャート	59
表3 寛平人寶螢光X線分析チャート	59

写 真 図 版

卷頭カラー図版 口暮遺跡出土縄・灰釉陶器、銅鏡

- 図版1 1. 占墳時代遺構面（北から）
2. 平安時代遺構面
- 図版2 1. SB01（北から）
2. SB02（北から）
- 図版3 1. SX01（北から）
2. SD01, 02（北から）
- 図版4 1. SK01 遺物出土状況
2. P-111 遺物出土状況
- 図版5 暗褐色砂質土、堅穴住居址出土上師器
- 図版6 暗褐色砂質土、堅穴住居址出土下師器
- 図版7 暗褐色砂質土、堅穴住居址出土土師器、弥生土器
- 図版8 褐色砂質土、ピット、土坑出土下師器
- 図版9 褐色砂質土、ピット、土坑出土上師器、須恵器
- 図版10 褐色砂質土、ピット、土坑出土須恵器
- 図版11 褐色砂質土、ピット、土坑出土黒色土器
- 図版12 褐色砂質土、ピット、上坑出土上縄・灰釉陶器
- 図版13 褐色砂質土、ピット、溝出土上鍊、娟壺
- 図版14 SD01 出土土器、陶磁器、石硯
- 図版15 SD02 出土陶磁器、褐色砂質土、ピット出土瓦、皇朝鏡、銅鏡
- 図版16 褐色砂質土、ピット出土鉄製品、鉄滓、SD01, SD02 出土銅鏡

第Ⅰ章　はじめに

1. 試掘調査に至るまで　　神戸市中央区周辺は、慶応3年（1867年）の兵庫開港や、居留地の建設以後、急速に市街地化し、明治末年には現在の街区とほとんど変わらない様相を呈している。このため、遺跡の分布状況も不明確で、今回報告する日暮遺跡についても「周知の埋蔵文化財包蔵地」としては認知されていなかった。
2. 遺跡の発見　　神戸市では、既成市街地内的人口の減、高齢化、住宅の老朽化などにより、都市の活力が低下してくるというインナーシティ問題に対応するために、昭和52年に市営八雲第2住宅を建築し、さらに、道を隔てた南側に市営日暮住宅を建設することとなった。
- 昭和61年5月19日、神戸市住宅局から神戸市教育委員会へ日暮住宅建設事業を含む公営住宅建設事業に対する意見書が提出された。これに対し教育委員会は、当該地の遺跡の分布状況は不明確であり、現況では分布調査は不可能なため、試掘調査が必要な旨、回答を行った。
- 昭和61年8月1日の試掘調査の結果、3か所の試掘坑から、弥生時代の土器片を含む遺物包含層が検出された。
- しかし、8月1日の試掘調査では、建設計画予定地内における遺跡の範囲、規模等が明らかでないため、9月16・18日にトレーナによる試掘調査を実施した。その結果、3条のトレーナから平安時代の遺物包含層、遺構（柱穴）、古墳時代の遺物包含層等が確認され、二時期にわたる遺跡であることが判明した。
- これらの試掘調査の結果を基にして、教育委員会と住宅局との間で、設計、工法等の変更によって現状保存を図ることが可能であるかという協議が行われたが、建設予定地のほぼ全域にわたって遺跡が存在するため、現状保存は不可能という結論に達し、発掘調査を実施することに決定した。
3. 遺跡の命名　　当遺跡の命名については、文化財保護、啓発の立場から、遺跡の存在の周知徹底を図るために遺跡名によってその位置を想起しやすい様にするため現在の町名をとって命名することにし、遺跡の所在地である神戸市中央区日暮通1丁目から「日暮遺跡」と名づけた。

第Ⅱ章 遺跡の立地と歴史的環境

1. 遺跡の立地

日暮遺跡は、六甲山系から派生する尾根から流れ出る生田川等の中小河川によって形成された北西から南東へ下がる沖積地末端部に位置し、現況の地表面は、標高約13.5mである。

現在の海岸線から調査地までの距離は、約700mであるが、古代以前には約200～300m隔たった位置にあったと思われる。

また、この地は明治以降、急速に市街地化が進んできた地区である。明治18年測量の地形図では大半が耕作地であったが、明治43年測図の地形図では、現在の街区の形状がほぼ完成していることが判る。

現在の遺跡周辺は、住宅や商店、小規模な工場が密集している。また東側や南側の臨海部には、大規模な製鉄工場、ゴム工場等が林立している。



図1. 調査位置図

S = 1/2,500

2. 遺跡周辺の歴史的環境

日暮遺跡周辺は明治～大正期に市街地化しており、周辺の遺跡についても、大正～昭和初期に報告されたもの以外は、その実態は明らかでなかった。しかし近年の市街地再開発によって、発見された遺跡も多い。

1. 旧石器・ 縄文時代

旧石器時代の遺跡については、周辺では、現在のところ確認されていない。また、縄文時代の遺跡は、旧河道内から早期～晩期の土器を出土した宇治川南遺跡、前期、後期の炉址、生活面等を検出した雲井遺跡、後期の土坑を検出した楠・荒田町遺跡等が存在する。

2. 弓生時代

大開遺跡では、前期前半の豊穴住居址、溝、土坑等が発見された。宇治川南遺跡では、旧河道内から、縄文土器とともに、前期の上器が出土している。楠・荒田町遺跡では、前期～中期初頭にかけての貯蔵穴、木棺墓が確認された。雲井遺跡では、中期の方形周溝墓が発見されている。また、丘陵上に存在する遺跡としては、布引丸山遺跡（中期）がある。さらに今回の調査地より約600m東には、浜町遺跡が存在する。

3. 古墳時代

前期～中期にかけての集落遺跡は明らかでないが、その時期の古墳については、当時の海岸線直近と考えられる場所に西求女塚古墳が存在する。

中期～後期の集落遺跡については、豊穴住居址、掘立柱建物址、溝等が発見された生田遺跡がある。後期の集落跡としては、渾川遺跡が存在している。また周辺には、割塚古墳、生田町古墳、中宮古墳、三本松古墳等の古墳が明治末～昭和初期頃まで存在していたが、急速な市街地化によって現在ではその大半が消滅しており、詳細については不明なものが多い。

4. 奈良～平安 時代

日暮遺跡の東約1km付近は、古代には『万葉集』に記される「敏馬浦」とよばれる天然の良港があったと考えられる。

また、当地域は古代においては、攝津国菟原郡布敷郷に属していたと推定される。当遺跡から、西へ約7.5kmの地点には、平安時代の遺跡である神奈遺跡がある。

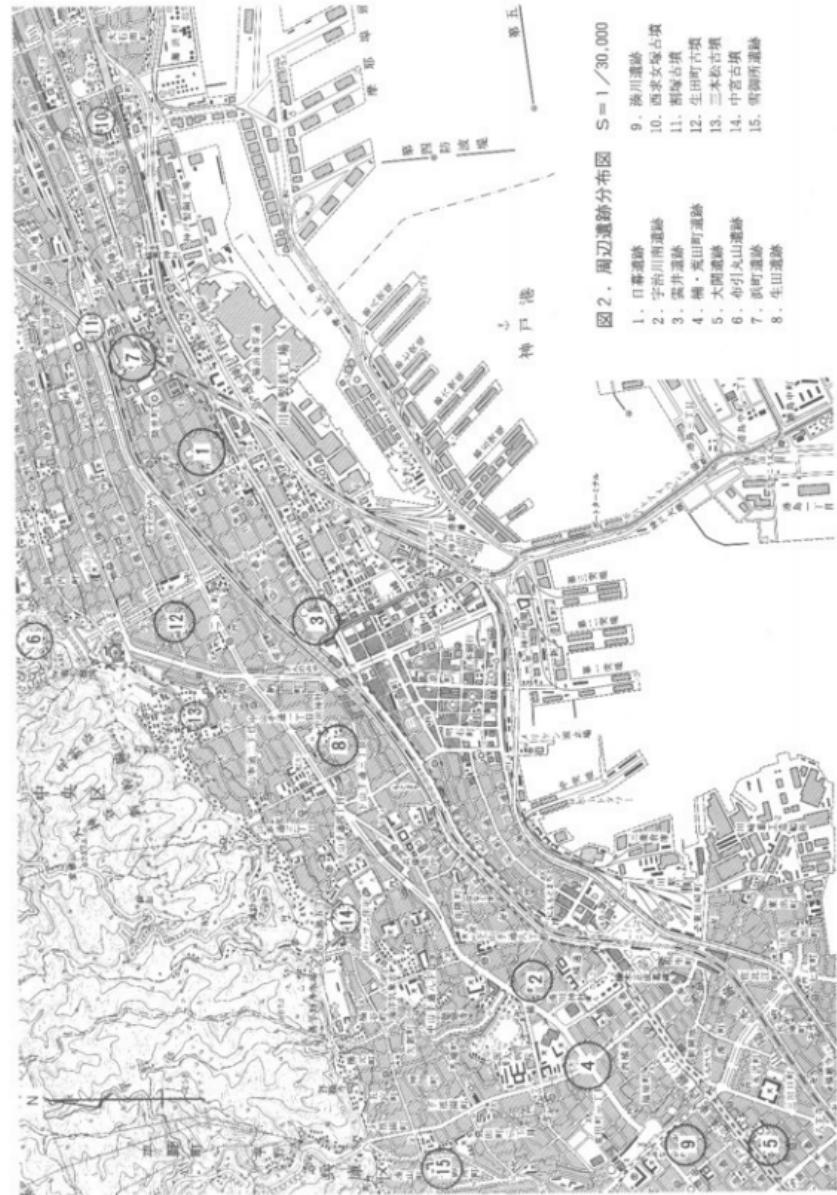
平安時代末期には、平清盛によって、大輪田泊、雪御所等が現在の中央区～兵庫区付近に構築されるが、それらの遺構については未だ充分に解明されていない。

5. 鎌倉～室町 時代

中世になると、中央区東部付近に葺屋庄とよばれる莊園が存在していたことが文献に記されている。しかし、その正確な位置、範囲等は明らかではない。

註

- (1) 『昭和58年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1986
- (2) 昭和62年度、神戸市教育委員会調査
- (3) 『地下に眠る神戸の歴史展Ⅴ』パンフレット神戸市教育委員会 1987
- (4) 『大開遺跡現地説明会資料』神戸市教育委員会 1988
- (5) 註1と同じ
- (6) 丸山潔・丹治康明『楠・荒田町遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会 1980
- (7) 『雲井遺跡現地説明会資料』神戸市教育委員会 1987
- (8) 小林行雄「神戸市布引丸山の弥生式土器」『考古学』6-4 1935
- (9) 『神戸市文化財分布図』神戸市教育委員会 1988
- (10) 『昭和60年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1988
- (11) 『地下に眠る神戸の歴史展Ⅵ』パンフレット神戸市教育委員会 1988
- (12) 昭和61年度、神戸市教育委員会調査
- (13) 『神戸市文化財分布図』神戸市教育委員会 1988
- (14) 木村次雄・小林行雄「釧了発見の神戸市生田町古墳」『考古学雑誌』20-6 1930
- (15) 梅原末治「神戸中宮古墳とその遺物」『古墳記』 1926
- (16) 『神戸市文化財分布図』神戸市教育委員会 1988
- (17) 『万葉集』卷三 柿本朝臣人麿鷦族歌八首中に「珠藻苑 敏馬乎過 夏草之 野嶋之 埼爾舟近著奴」とある。
- (18) 肾本宏明『神楽遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会 1981
- (19) 清水正健『莊園志料』上巻によれば、当庄は後白河院の長講堂領であり、建久2年(1191)の文書に確認されるという。



第Ⅲ章 発掘調査の概要

1. 調査の経過

発掘調査については、住宅棟建設が予定されている範囲の約730m²について実施することになった。

調査の開始

調査は、昭和61年10月20日から重機による表土掘削を開始し、10月27日から人力による平安時代の遺物包含層掘削を始めた。

平安時代の遺構の確認

遺物包含層除去作業と併行して、11月15日まで遺構検出作業を行い、平安時代の柱穴や土坑、溝等を多数確認した。

現地説明会

平安時代の遺構面の精査を完了した段階で、市民に発掘調査の成果を報告するために、現地説明会を11月23日に行い、約500人の見学者を得た。

古墳時代の遺構の確認

11月24日にはクレーンによる写真撮影を行い、12月3日より、古墳時代の遺構面の精査を開始し、竪穴住居址等の遺構を確認した。

調査の完了

古墳時代の遺構面の調査を完了後、さらにトレンチによる下層の確認調査を行い、昭和62年1月20日に現場作業を終え、1月22日に発掘器材の撤収を完了した。

地区割の設定

発掘調査の際、遺物出土の位置を明確にするために、調査坑の東西のほぼ中央にセンターラインを設け、4m間隔の方眼で地区杭を設定した。

また、遺構の測量作業については、国土方眼座標の基準点（神戸市三等多角点No89103、89214からトラバース測量によって引用）を調査区内に設け、尖測作業の基準とした。

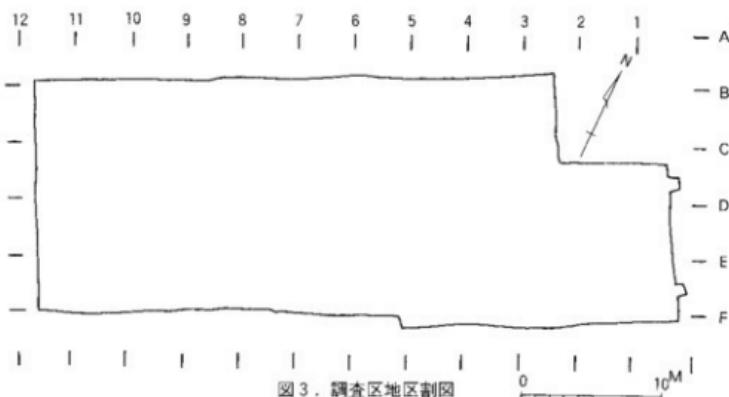


図3. 調査区地区割図



1. 調査前状況



2. 表土掘削作業



3. 平安時代遺構面検出作業



4. SD 02 調査風景



5. 現地説明会風景



6. クレーン車による写真撮影



7. 古墳時代遺構面検出作業



8. SB 01 検出作業

図4. 調査状況写真

第Ⅳ章 遺構

1. 基本層位

調査地は以前、公共施設および住宅地として使用されていたため、現代の盛土層に厚くおおわれているが、遺物包含層まで達するような基礎は少なく、遺構面は比較的良好に遺存していた。

調査地の基本的層位は、以下の通りである。

- (1) 盛土層
- (2) 暗灰色砂質土層（耕作上層）
- (3) 褐色砂層 （鎌倉時代～室町時代の土器を若干含む。）
- (4) 褐色砂質土層 （平安時代の遺物包含層）
- (5) 暗褐色砂質土層 （平安時代の遺構面、古墳時代の遺物包含層）
- (6) 黒色砂質土層 （古墳時代の遺構面）
- (7) 黄灰色砂質土層（地山層）

現地表面から地山面までの深さは、約2mである。

褐色砂質土層、暗褐色砂質土層、黒色砂質土層は東西方向では、ほぼ水平に堆積し、南北方向では、北から南に緩く傾斜して堆積している。

なお、精査完了後、調査区を南北に横断するかたちで断面を取ったところ、黄灰色砂質土層の下には、褐色混礫砂層と黄灰色砂質土層が互層になって堆積しており、南北方向へ下降していくことが明らかになった。また、遺構面以下の中には、遺物の包含は認められなかった。

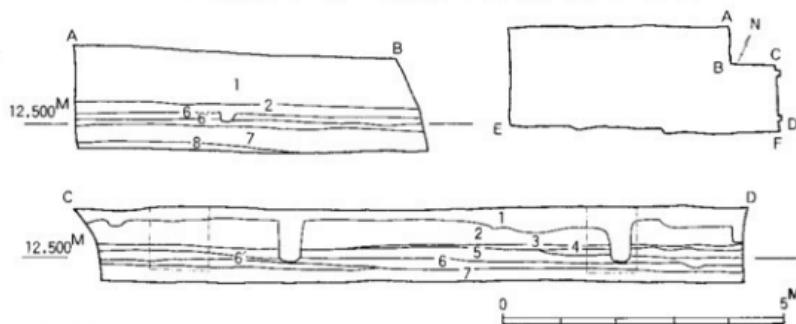


図5. 断面土層図（東壁）

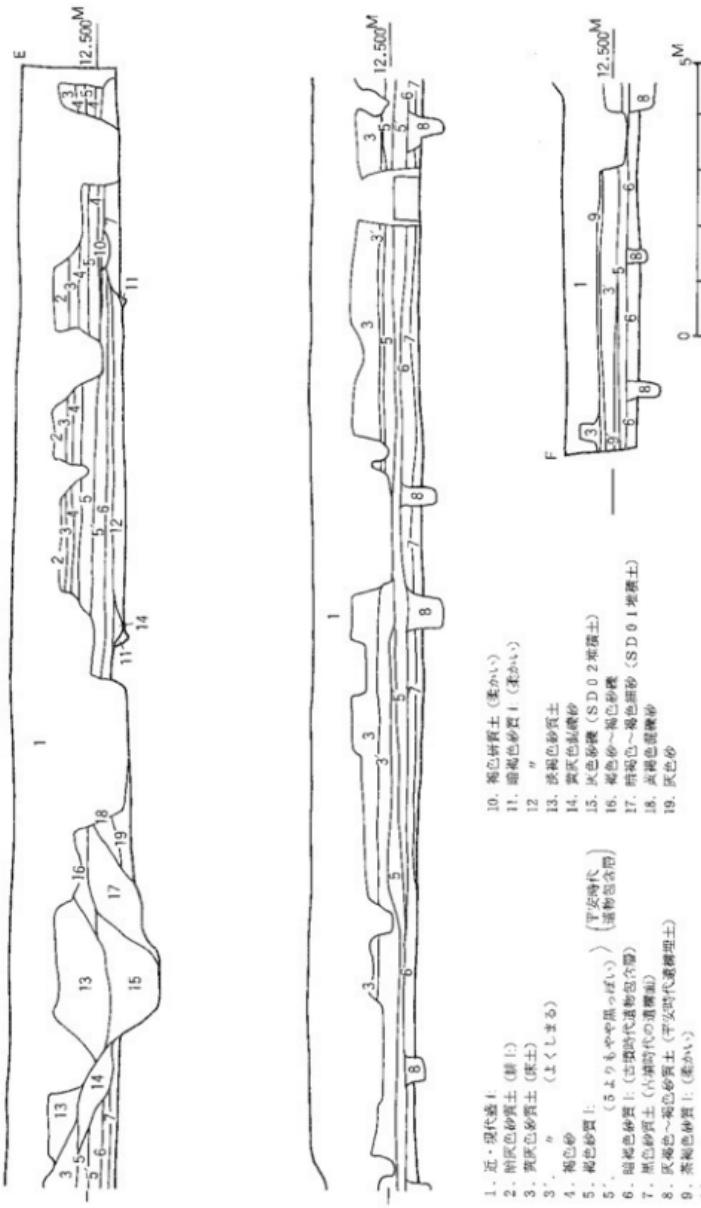


図 6. 断面土層図（南壁）

1. 近・現代土
2. 阿灰色砂質土（鮮土）
3. 阿灰色砂質土（底土）
4. “
5. 茶褐色砂質土
6. 茶褐色砂質土（古墳時代遺物包含層）
7. 黑褐色質土（古墳時代の瓦礫層）
8. 水海色～褐色砂質土（平安時代遺構土）
9. 茶褐色砂質土（底土）
10. 茶褐色砂質土（柔かい）
11. 茶褐色砂質土（柔かい）
12. “
13. 茶褐色砂質土
14. 阿灰色粘土
15. 水海色砂質土（SD 0.2 砂質土）
16. 水海色～褐色砂質土
17. 水海色～褐色砂質土（SD 0.1 砂質土）
18. 茶褐色砂質土
19. 水海色

2. 検出遺構

日暮遺跡は、古墳時代および平安時代の2時期の遺構面を有する遺跡である。それぞれの面で確認され、本文中に記載された遺構の時代は次の通りである。なお、遺構は堅穴住居址、掘立柱建物址—SB、堅穴住居址状遺構—SX、上坑—SK、溝状遺構・河道—SD、ピット—Pの略記号で表記し、遺構毎に番号を付した。なお土坑とピットはその形状から判断しており、厳密な区別はない。

また、ピットについては、検出した順に番号を付した。

SB 01～SB 02は古墳時代堅穴住居址、

SB 03～SB 12は平安時代掘立柱建物址、

SX 01は古墳時代堅穴住居址状遺構、

SK 01は古墳時代上坑、SK 02～05は平安時代上坑、

SD 01は、鎌倉～室町時代の河道、SD 02は、江戸～明治時代の溝

P-111は古墳時代の遺構、

P-26、140、193、194、321、322は、平安時代の掘立柱建物築造の際の地鎮に関係する遺構と考えられる。

1. 古墳時代

平安時代の遺構面であり、古墳時代の遺物を包含する暗褐色砂質土を除去した段階で、遺構検出を試みた結果、堅穴住居址2棟、堅穴住居址状遺構1箇所、土坑、ピット等を確認した。遺構は調査区の西半および北東隅に分布し、南西部には確認されなかった。

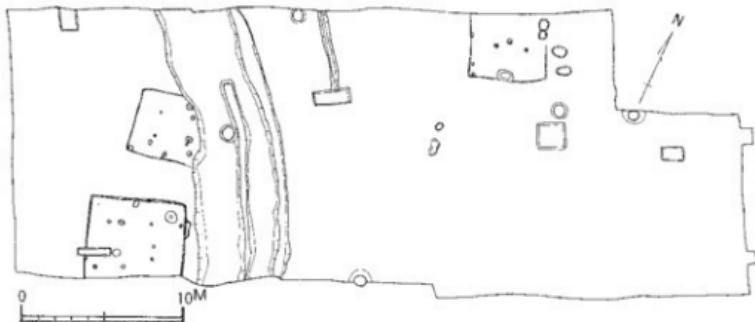


図7. 古墳時代遺構配置図

SB 01

SB 01は、一边4mの方形の竪穴住居址で、東側を中世の河道SD 01によって削られている。

建物の柱は、4本柱で、柱間は約2mである。南端で、粘土塊が床面に付着した状態で検出されている。床面では、周壁溝は検出されなかった。

遺構検出面から床面までの残存高は、約10cmである。

遺物は、土師器の高杯や甕が住居址の床面から離れた状態で出土した。出土状況からみて、住居廃絶後、住居址が埋没してゆく過程において土器等を投棄したものと考えられる。

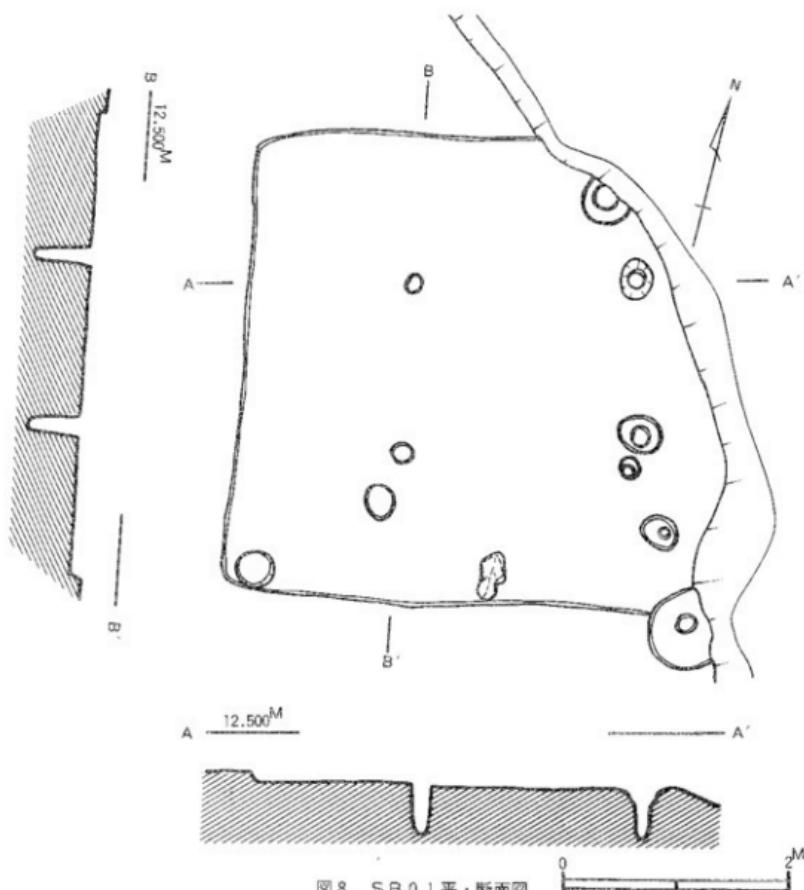


図8. SB 01 平・断面図

SB 02

SB 02は、東西6m、南北5.5m以上の方形の堅穴住居址で、南側が調査範囲外に延びている。

建物の柱は、4本柱で、東西2.7m、南北約2.1mの柱間距離がある。また、幅10cm、深さ5cm程度の周壁溝を有する。遺構検出面から床面までの残存高は、10~15cm程度である。

住居址東南端付近の埋土中から、土師器高杯、甕等が出土した。SB 01、SB 02いずれの住居址においても床面から離れていた状態で出土しており、床面に接した形での土器の出土は認められなかった。

これらの住居址の周辺では、古墳時代の包含層である暗褐色砂質土を除去中に、土器がかなり集中して出土したため、遺構が存在すると考え、精査に努めたがプラン確認ができず、黒色砂質土層まで掘削した段階でプランを確認した。このことから、これらの住居址は、暗褐色砂質土を掘り込んで築造されたと考えられる。

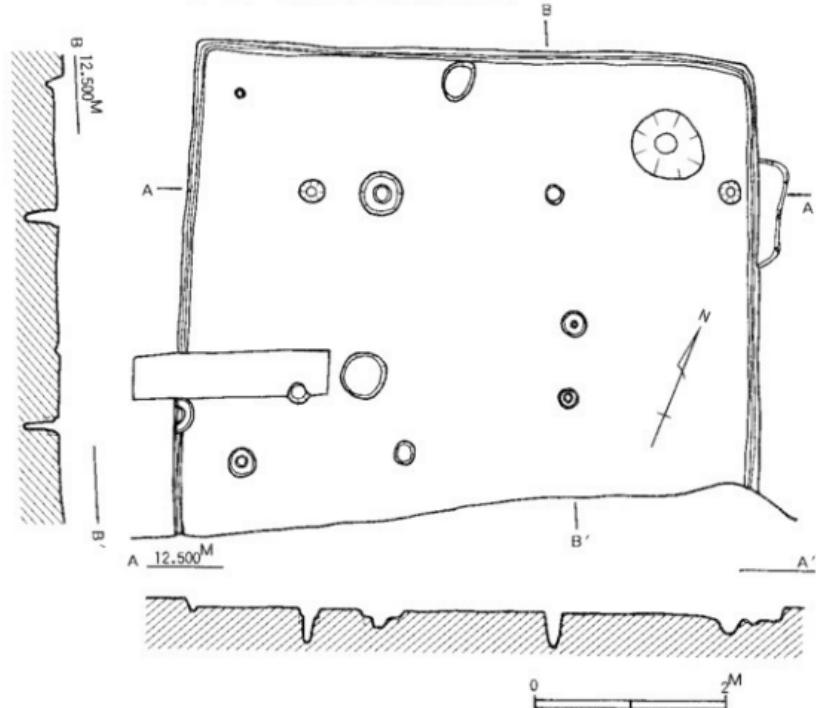


図9. SB 02 平・断面図

S X 0 1

東西5m、南北4m以上の方形を呈する遺構である。

南辺に、短径60cm、長径1mの上坑を有する。また、浅いピットが遺構内から確認されているが、柱としてはまとまりがない。

遺構を検出した段階で、深さは5~10cm程度しか残存しておらず、本来の深さは明らかではない。しかし、暗褐色砂質土除去中に、この付近から土器が集中して出土しており、この遺構が上記の層から切り込まれていたとも考えられるが、土層断面による観察では確認是不可能であった。

これらの遺物の出土状況がS B 0 1、S B 0 2と近似していることや、形状が方形を呈することから、この遺構は住居址であった可能性が高い。

また、S X 0 1内のピットの埋土より山陰系の土器の製作技法によつて作られたと考えられる壺の口縁部が出土した。

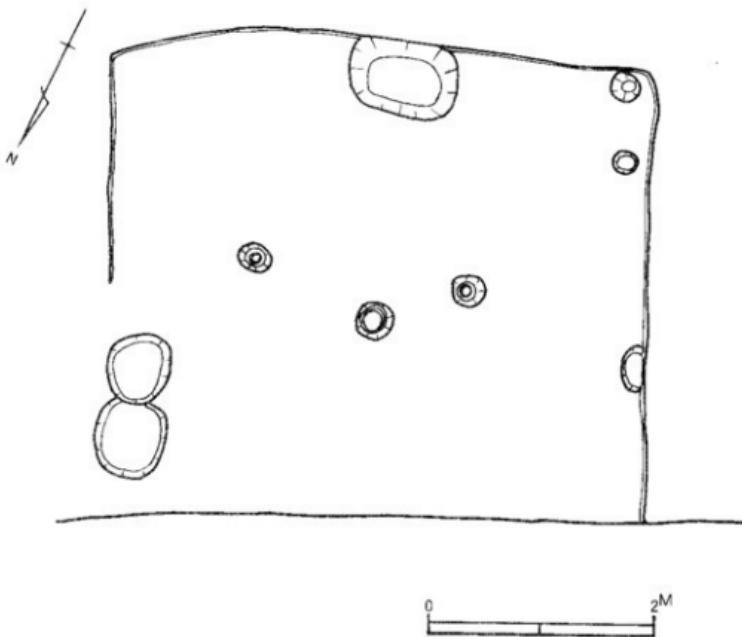


図10. S X 0 1 平面図

土坑・ピット

S K 0 1

P - 1 1 1

C - 5 区において、長軸方向1.1m、短軸方向50cmの不整な楕円形土坑を検出した。埋土中から、古墳時代の土師器甕が出土した。

S K 0 1 の北側に直径約50cmのピットを検出した。埋土中から、古墳時代の土師器高杯が出土した。

いざれの遺構から出土した土器も、遺構の底面から遊離した状態で出土し、遺構が掘り込まれてから若干の時間が経過した後に、遺物が投棄されたものと考えられる。

なお、この2つの遺構の位置するC - 5 区付近は、古墳時代の遺物包含層がほとんど存在しないため、これらの遺構は、平安時代の遺構面を精査中に確認している。

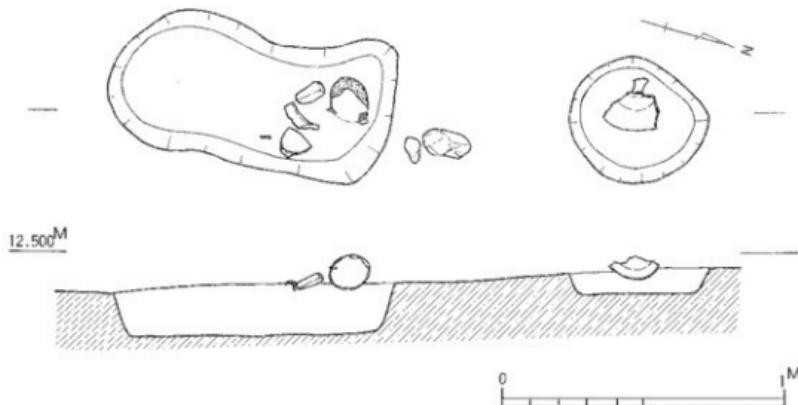


図11. SK 0 1、P - 1 1 1 遺物出土状況図

2. 平安時代

平安時代の遺物包含層である褐色砂質土を除去した段階で遺構面精査を行ったところ、柱穴、土坑、溝状遺構を確認した。しかし、これらの遺構の調査を完了し、下層にあたる古墳時代の遺構面を精査中に、上層の精査段階では検出できなかった遺構を確認したため、最終的にはピット340個、土坑4基、溝8条を確認した。

掘立柱建物址

ピットのほとんどは、中世～近代の河道SD 0 1、0 2の東側に集中し、西側にはやや空地をはさんで、小規模なピットが存在する。河道の東側のピットについては、北西～南東方向の柱列を構成し、多数の建物址が重複していたが、調査完了後、図上で復元した結果、掘立柱建物址が12棟確認された。

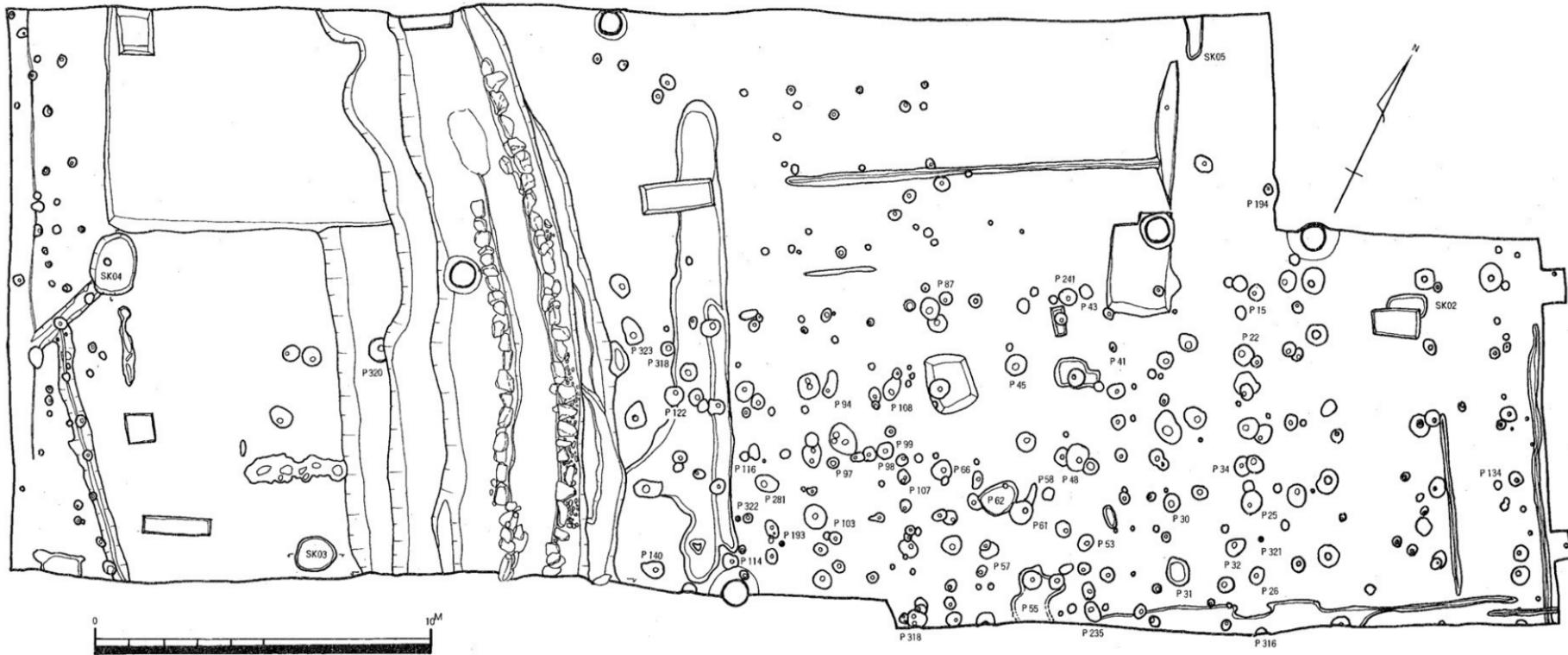


図12. 平安時代遺構配置図

SB 03 柱行3間(7m)、梁行2間(4.2m)の南に廂を持つ建物である。廂の出は約2.3mである。また廂を含めた建物規模は3間×3間となる。柱間距離は、柱行が2.3m、梁行が2~2.1mとなる。この建物は、SB 02、10の柱穴に切られている。軸は東西方向から北へ約30度振っている。桁方向が東西の唯一の建物である。

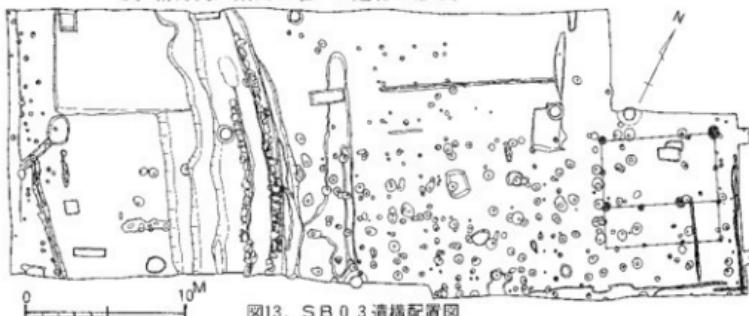


図13. SB 03 遺構配置図

SB 04 柱行4間以上(9.5m)、梁行2間(5.3m)の東と西の両面に廂を持つ建物である。廂の出は東西共に約2.3mである。主軸は南北方向から西へ約30度振っている。柱間距離は、柱行が2.1~2.3m、梁行が2.7mとなる。なお、西廂の北から4個目の柱穴の掘形底面から、地鎮のために埋納したと考えられる土師器杯が出土した。また、身舎西側の北から3個目と4個目の柱穴の間から土師器の鍋の中に上煎器の皿、貨幣(皇朝錢・寛平大寶)を2枚以上納めた遺構が確認された。

P-140
P-322
SB 05 柱行5間以上(10m)、梁行1間(4m)の建物である。SB 04の柱穴を切って柱掘形を掘削している。東側に廂を有しており、廂を含めた建物規模は5間以上×2間となる。柱間距離は、柱行が2.2m、梁行が4mとなる。主軸は南北方向から西へ約28度振っている。

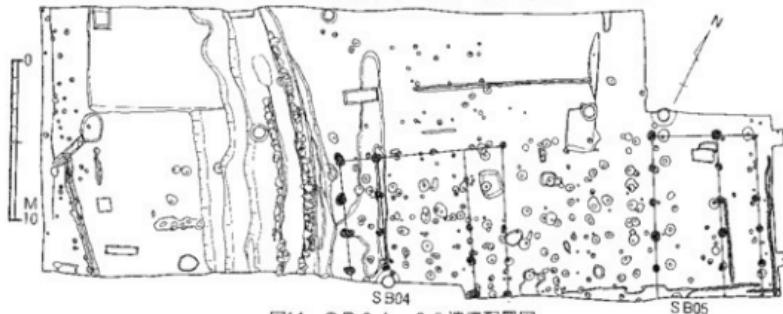


図14. SB 04, 05 遺構配置図

SB 0 6 柁行 3間以上 (6m)、梁行 2間 (4m) で、柾方向が南北の建物である。柱間距離は、柁行が1.8~2m、梁間が2mとなる。主軸は南北方向から西へ約30度振っている。

SB 0 7 柁行 5間以上 (10m)、梁行 2間 (4.2m) の東と西の両面に廂を持ち、廂の出は東は2.4m、西は2mである。廂を含めた建物規模は5間以上×4間となる。主軸は南北方向から西へ約30度振っている。柁間距離は、柁行が2.1~2.3m、梁行が2.7mとなる。また、身舎西側柱列の北から2個目と4個目の柱穴には柱の部材が残存していた。

P - 2 6 なお、東廂の北から5個目の柱穴掘形上面からは地鎮のために埋納したと考えられる貨幣（皇朝錢・延喜通寶）が1枚出土した。また、東廂の北から4個目と5個目の柱穴の間で、廂のやや外側と考えられる地点から上師器の皿を2枚重ねてその下に貨幣（錢種不明）数枚を埋納した構造が確認された。

P - 3 2 1

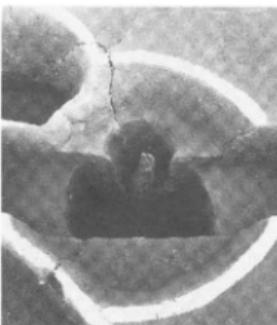


図15. 柱材出土状況写真

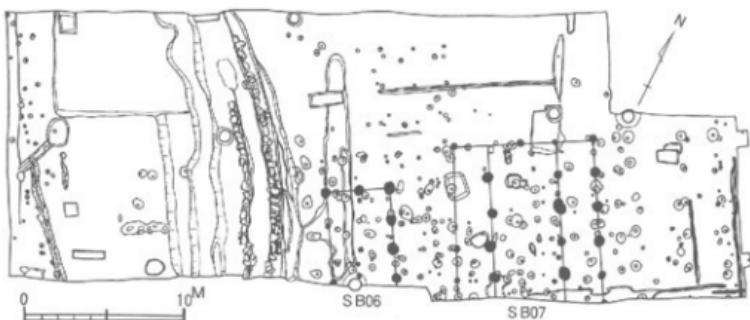


図16. SB 0 6, 0 7 遺構配置図

SB 0 8 柁行 4間以上 (9m)、梁行 1間 (5.3m) の建物である。ただし、北端の梁を支える柱穴は確認されていない。主軸は南北方向から西へ約30度振っている。柱間距離は、柁行方向が2~2.5mである。

SB 0 9 柁行 5間以上 (10m)、梁行 1間 (6m) の建物である。主軸は南北方向から西へ約30度振っている。柱間距離は、柁行が1.5~2.2m、梁行が2.2~3.6mとなる。西側に廂を有し、廂の出は約2.3mである。廂を含めた建物規模は5間以上×2間となる。



図17. SB 08, 09遺構配置図

SB 10 柁行4間以上(8.8m)、梁行2間(4m)の建物である。SB 08、05の柱穴を切って柱掘形を掘削している。主軸は南北方向から西へ約29度振っている。柱間距離は、柵行が2.2m、梁行が2mとなる。東側に廂を有し、廂の出は約1.9~2.2mである。廂を含めた建物規模は4間以上×3間となる。

SB 11 柁行3間(7m)、梁行2間(5m)の調査範囲内で完結すると推定される比較的規模の小さな建物である。主軸は南北方向から西へ約21°振っている。主軸方向がSB 03~SB 10の建物よりも北に偏っている。

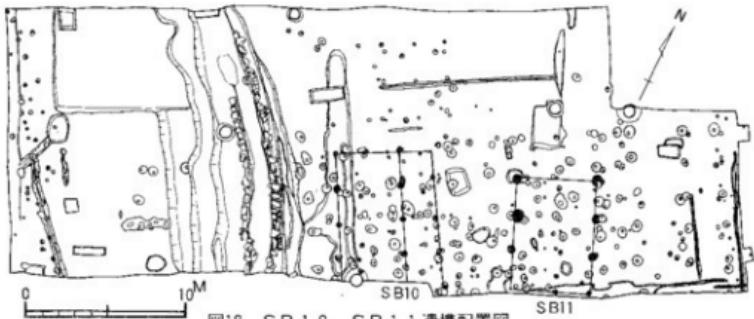


図18. SB 10, SB 11遺構配置図

SB 12 柁行5間、梁行2間の総柱建物である。柱間距離は、南北が2.3~2.4m、東西が2mである。主軸は、南北方向から西へ約29度振っている。

この建物址の柱穴の埋土は、包含層の上層にあった褐色砂が多く混入しており判別が容易であった。また、柱穴の掘形の大きさが他の建物のものと比較して、直径20cm内外と規模が小さいことが特徴である。さらに、SB 12以前の建物は、北端がほぼ一直線に並ぶという規則性があ

り、この建物はこの規制を逸脱していることから、他の建物よりも時期が若干遅るものと考えられる。



図19. SB 1 2 遺構配置図

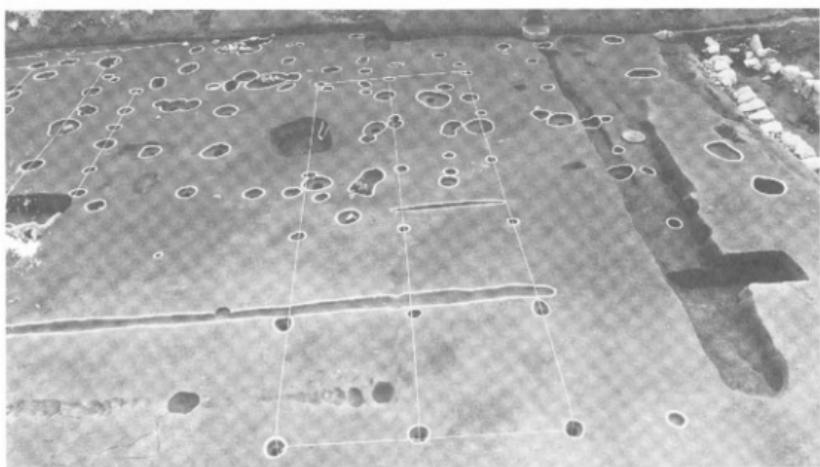


図20. SB 1 2 遺構写真（北から）

地鎮遺構

調査地内 6 箇所から、掘立柱建物築造に際して、地鎮のために埋納されたと考えられる土師器甕、土師器皿、土師器壺、皇朝錢等が単独あるいは組み合わさった状態で出土した。その出土状況は簡単にまとめると次の通りである。

- | | |
|-------------------------------|------|
| (1) 土師器甕を埋納した遺構 | 2 箇所 |
| (2) 土師器壺と貨幣（皇朝錢？）を埋納した遺構 | 1 箇所 |
| (3) 土師器甕に土師器壺、貨幣（皇朝錢）を納めた遺構 | 1 箇所 |
| (4) 柱穴の堀形内に貨幣（皇朝錢）、土師器壺を納めた遺構 | 2 箇所 |

P-193

土師器甕（図38No.65）を埋納した遺構である。P-193は、E-6区にあり、平安時代の遺構面である暗褐色砂質土を除去中に発見された。そのため、平面プランについては不明確であるが、甕が取まる程度の掘形を有していたと考えられる。土師器甕は、口縁部を上にし、ほぼ正置した状態で検出された。甕の下には、拳大の川原石が数個、置かれていた。

P-194

P-194は、C-2区にあり、調査区東端の側溝を掘削した際に土師器甕（図38No.66）が出土したことで確認された。土師器の甕は口縁部をやや傾けた状態で出土し、精査の結果浅い掘形を有することが判明した。なお、器の中の充填土中からは、遺物は発見できなかった。

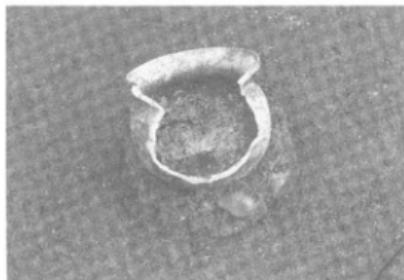


図21. P-193 遺物出土状況写真

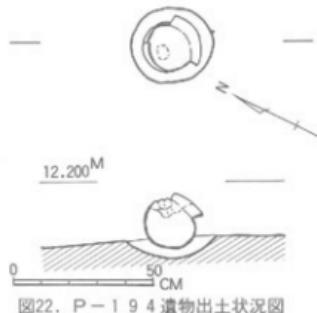
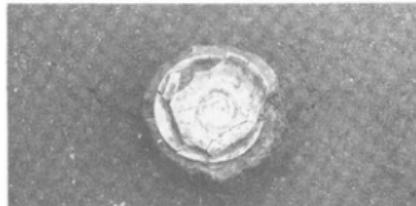


図22. P-194 遺物出土状況図

P-321

土師器壺（図38No.63.64）と貨幣（皇朝錢？）を埋納した遺構である。土師器壺を2枚を重ね合わせ、その下に貨幣を数枚納めている。これらの壺のうち上側のものには、灯明皿として使用された痕跡が認められる。貨幣は、壺のほぼ真下にまとまって出土したが、銹化が激しく、錢文、枚数共に不明である。なお、この遺構は明確な掘形を検出できなかったが、平安時代の遺構面を除去中に上記の遺物を確認したため、この時代の面を切り込む浅い掘形を有していたと思われる。



1. 土師器壺出土状況



2. 貨幣出土状況

図23. P-321 遺物出土状況写真

P-322

上師器鍋の中に皇朝錢（寛平大寶2枚以上）を入れ、その上に土師器坏（図38Na55）（灯明皿として使用された痕跡を有する。）を納めた遺構である。なお、皇朝錢には稗、粟と思われる穀粒が付着している。周辺を精査したが明確な掘形は確認できなかった。上記の遺跡同様に、おそらく浅い掘形を有するものと考えられる。

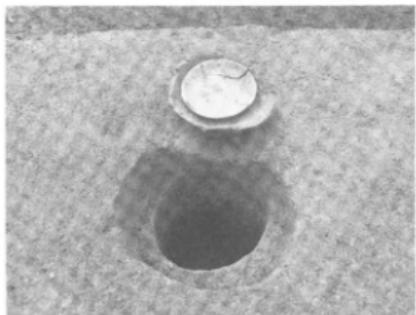


図24. P-322 遺物出土状況写真

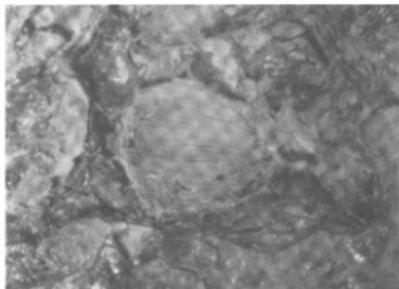


図25. 皇朝錢付着植物種子顕微鏡写真
(約17倍拡大)

P-26

柱穴の掘形内に貨幣（皇朝錢）を納めた遺構（P-26）と土師器坏

P-140

を納めた遺構（P-140）がある。P-26については、皇朝錢が1枚出土した。その出土位置は、掘形の検出面からマイナス10cmで、錢文を下にしてほぼ水平な状態で出土した。錢種は、延喜通寶である。また掘形内からは、土師器の皿、鍋（図38Na46～48、図39Na68）が出土している。

P-140については、土師器の坏（図38Na56）（灯明皿として使用された痕跡を有する）が柱穴の掘形底にほぼ接し、口縁部を上にして出土した。

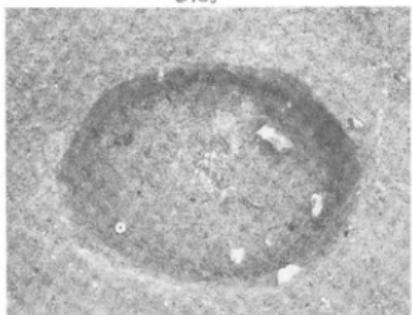


図26. P-26 遺物出土状況写真

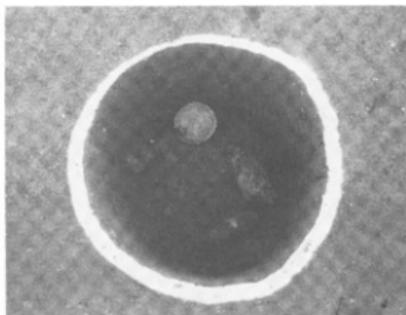


図27. P-140 遺物出土状況写真

これらの遺構、遺物はすべて柱穴の集中する場所に分布しており、掘立柱建物築造の際に、地鎮の意味をもって埋納されたと考えられる。

また、P-321、P-322、P-140で出土した土師器の坏は、いざれも口縁部端に灯芯の痕跡があり、灯明皿として使用されていることが、共通する点であり、地鎮の祭に際しての儀式の一端を窺い知ることができる。

- 上坑 SK 02 C-1区に位置する長辺1.2m、短辺約0.7m、深さ約0.15mの長方形を呈する遺構である。遺物は須恵器、土師器の細片が出上した。
- SK 03 E-9区にあり、東西1.2m、南北約1m、深さ約0.2mの不整円形の遺構である。埋土からは須恵器碗、摺鉢、土師器片等が出土した。(図40Na.86.87.95.96)
- SK 04 C-10、11区にあり、東西1.4m、南北約1.8m、深さ約0.25mの楕円形の遺構である。埋土からは須恵器摺鉢、土師器片等が出土した。(図40Na.91.92)
- SK 05 A-2、3区にあり、東西1.2m、南北約0.4m、深さ約0.10mの長楕円形の遺構である。埋土からは用途不明土製品が出土した。(図39Na.67)



図28. SK 03、04断面図



図29. SK 05
遺物出土状況写真

3. 鎌倉・室町時代
SD 01

調査区の西半を横断するかたちで河道跡 SD 01 が検出された。この河道跡は幅約 8 m、深さ約 1 m で埋土は灰色～黄褐色細砂が堆積している。

その堆積状況からみて、ある程度の流速をもって北から南に流れ、漸次的に土砂が堆積していったようである。

遺物は、古墳時代～室町時代の土器、陶磁器、石硯等が各層からほぼ一様に出土したが、鎌倉時代～室町時代の遺物が最も多く、遺存状態も良好であった。また、層位による出土量の偏りはほとんど見られなかつた。北端部の底付近から北宋銭(天禧通寶1017年初鑄)が出土している。

4. 江戸・明治時代
SD 02

鎌倉時代～室町時代に流れていた河道 SD 01 を利用して江戸時代に石組みの溝を造っている。石組みは北端部を後世の擾乱により消失しているが、1～3 個の石材を面を合わせて積み上げており、一石目に丸太材を横に渡し杭で固定している所がある。また、裏込めに円礫を入れている部分もある。溝の堆積土は灰色～黄褐色粗砂・砂礫であり、かなりの程度の流速によって土砂が短時のうちに堆積していったと推定される。堆積土中からは陶磁器、金属製品、銅銭(寛永通寶)、鉄砲玉等が出土している。溝内から出土した陶磁器の時期の下限は明治時代前半であり、その段階には SD 02 は機能を終えていたものと考えられる。

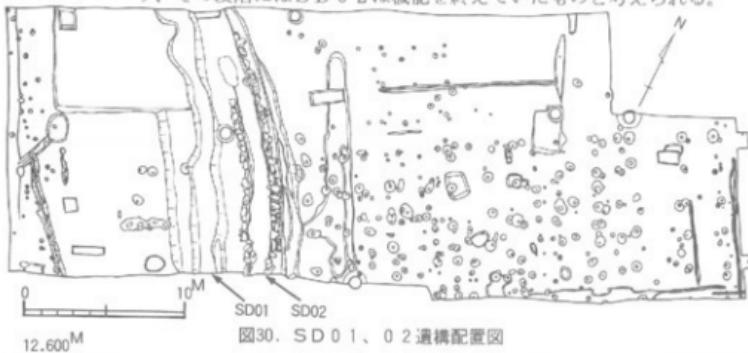


図30. SD 01、02 遺構配置図

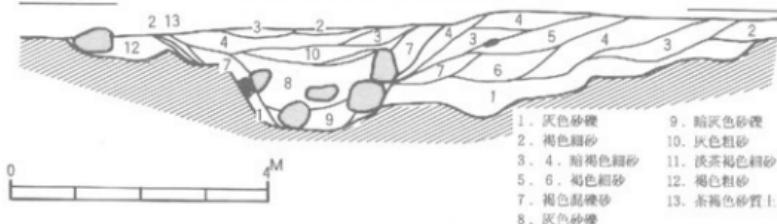


図31. SD 01、02 断面図

第V章 遺物

1. 遺物の概要 今回の調査では、弥生時代～江戸時代までの土器、陶磁器、貨幣、鉄製品等が、28ℓコンテナで約40箱出土した。
- これらの遺物の大半は土器、陶磁器であり、その他の遺物は少ない。遺物の多くは、古墳時代の遺物包含層である暗褐色砂質土および堅穴住居址の覆土中や、平安時代の遺物包含層である褐色砂質土、掘立柱建物址の柱穴、中世河道跡および近世の溝跡から出土している。
2. 暗褐色砂質土・堅穴住居址・堅穴住居址状遺構・土坑ビット出土遺物 古墳時代の遺物包含層である暗褐色砂質土、堅穴住居址SB01、SB02、堅穴住居址状遺構SX01、土坑SK01、ピットP-111からは同化可能な土器が出土した。
- 堅穴住居址、堅穴住居址状遺構の覆土から出土した土器が最も多いが、ほとんどが住居址床面から遊離した状態で検出されている。上記の遺構から出土した土器はすべてが土師器であり、その器種は、甕形土器、壺形土器、高环形土器、鉢形土器、小型丸底壺、手捏ね形土器などである。以下その概略を説明する。なお、以下に付した番号は、挿図の各遺物につけた番号である。
- 甕形土器は口縁部の形状から5種類に分類できる。
- (1) 内傾ぎみに立ち上がり、口縁端部に面を有するもの。 (2, 3)
 - (2) 外反して立ち上がり、端部を丸くおさめるもの。 (7, 8, 9)
 - (3) 内傾気味、あるいはやや直立して立ち上がり、端部を延ばすもの。 (4, 5)
 - (4) 外反して立ち上がり、端部をやや延ばすもの。 (1)
 - (5) 外反して立ち上がるが、端部の長さが非常に短いもの。 (6)
- また、体部から底部にかけてに細かい単位の叩き目を施し、小さな平底の底部を持つ甕形土器(32, 34)が出土している。
- 壺形土器は出土量は少ないが、口縁部の形状で3種類に分類できる。
- (1) 外反して立ち上がり、端部外面に面を持つもの。 (10)
 - (2) 外反して立ち上がり、端部を延ばすもの。 (11)
 - (3) 二重口縁の形態をとるものの。山陰系の土器の製作技法を取り入れたものか、あるいは搬入品の可能性がある。 (30)
- 高环形土器 比較的多く出土しており、环部の形態で4種類、脚部の形態で3種類に分類が可能である。(12～24, 28, 33)

坏 部	(1) 坏部に稜を有するもの。	(12, 16, 17, 33)
	(2) 坏部の稜の部分が段になるもの。	(13)
	(3) 坏部の稜線が明確でないもの。	(14, 15, 18, 19, 20)
	(4) 口径が小さく楕形の坏部を持つもの。	(21)
脚 部	(1) 脚柱部と脚台部の屈曲が明確なものの。	(13, 17, 18, 23, 24, 28)
	(2) 脚柱部と脚台部の屈曲が明確でないもの。	(12, 22)
	(3) 他の脚部より径が小さく、脚柱部の中空部分がほとんどないものの。	
		(33)

また、(2)については脚部の円孔の数によって2種類に細分できる。

- (1) 脚部に3つの円孔を有するもの。 (12)
- (2) 脚部に4つの円孔を有するもの。 (22)

鉢形土器
(31, 35)
小型丸底壺
(25, 26, 27)
手捏ね形
土器(29)
弥生土器
(36, 37)

小型の鉢形土器の底部がSB 02(31)およびSK 01(35)の覆土中より出土している。(31)は底部外面を指おさえによって凹ませており、指頭圧痕が顕著に残っている。(35)は底部外面はそれほど凹んでおらず、外面はナデ調整、内面はヘラ状工具で調整している。

図化可能なものは3個体出土した。
口縁部の長さが短く、やや長胴化し粗雑な作りのもの。 (26, 27)
口縁部が長く、刷毛目で丁寧に仕上げるもの。 (25)

竪穴住居址SB 01の覆土から手捏ね形土器が一個体出土している。器壁全体に指頭圧痕が残り、粗雑な作りである。

古墳時代の遺物包含層である暗褐色砂質土中から弥生土器の破片が2片出土している。いずれも壺形土器の破片と思われるもので、外面に複雑の簾状文を施すものと、柳描文とノの字形の列点文を施文するものがある。2つの破片とも相接した地点で出土しており、胎土も近似していることから同一個体の可能性が高い。

銅 鐵
重機による掘削土を除去中に、
銅鐵を一点採集した。

残存長3.5cm、最大幅1.2cm、
有茎式で、ほとんど欠失してい
るが、腸抉を有する。

銅鐵は、4世紀代を境に、出
土例が減少する。神戸市内にお
ける古墳時代前期の出土例とし
ては、兵庫区夢野丸山古墳に次
いで2例目である。

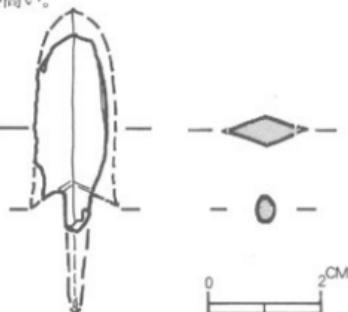


図32. 銅鐵実測図

3. 褐色砂質土
掘立柱建物
址・土坑・
ピット出土
遺物 平安時代の遺物包含層である褐色砂質土、掘立柱建物址の柱穴、土坑、
ピットから岡化可能の遺物が出土した。上器は土師器、須恵器、縁釉・
灰釉陶器、黒色土器、土鍾、鉢壺、瓦等の多種類にわたる。
- 上 鍋 器 盆(38~49) 実測可能であった上器では土師器が最も多く、次いで須恵器、黒色土器、縁・灰釉陶器の順である。
- 皿、杯、甕、鍋、羽釜、高杯、用途不明十製品等が出土している。
直径17cm以上の大型のもの(38)および、直径9cm~12cm(39~49)
までの小型の2種類のものがある。
(39~49)までの小型のものについては3種類に細分できる。
- (1) 口縁部がいわゆる「ての字」状を呈するもの(41~49)
(2) 底部を指おさえで調整し、底部と口縁部の境を屈曲させ、口縁部外
面は横方向のナデで調整するもの(40)
(3) 器壁が厚く、底部を回転糸切り技法で切り離すもの(39)
- 环(50~64) 底部の形態により分類すると次の様になる。
- (1) 高台が付くもの(50,51)
(50)は輶轆成形の後に底部をへらで切り離し、断面三角形の高台
を貼りつけるもの。(51)はナデと指おさえによって成形した後、断面
三角形の小さな高台を貼りつけるものである。
- (2) 底部がへら切りで未調整なもの(54~56,63,64)
体部が直線的なもの(51,56,63,64)、体部中ほどで内傾するもの
(55)がある。
- (3) 底部が手捏ね成形で丸い底のもの(52,53,57~62)
口縁の形態が直線的なもの(52,53,59)、外反するもの(57,58)内
傾するもの(62)、内傾し口縁端部に段をもつもの(60,61)がある。
- 甕(65,66) 2個体の完形品が地鎮遺構P-193(65)、P-194(66)より出
土している。調整技法は同一であるが、(65)は球形に近い体部で口縁端
部に面を持つ。(66)はU字形の体部で、粘土組の痕跡が内面に残り、口
縁端部は丸く納める。
- 鍋(68~70) 口径が24cm程度の小ぶりなもの(68)、口径が25~29cm程度の大型の
もの(69,70)がある。いずれも体部外面は刷毛目調整、口縁部外面は横
方向のナデが施されるが、内面については調整方法が異なっており、
(68)は体部内面から口縁部にかけて刷毛目調整が施される。(69)は体
部内面には刷毛目調整、口縁部には横方向のナデが施されている。(70)
は体部内面には縦方向のナデ、口縁部は刷毛目調整が施されている。

- 羽 父**
(71, 72) 口径が22cm程度の小ぶりなもの(71)、口径が30cm程度の大型のもの(72)がある。(71)は体部外面は刷毛目を施し、内面はナデている。また、口縁端部および鈎の部分に端面を作り出している。(72)は体部の内外面共にナデており、口縁部および鈎の部分は丸く納めている。
- 高坏 (73)** 脚部の破片が、褐色砂質土より出土している。外面はヘラ削りで八角形の面取りを行い、内面は接合時に円筒をしほるため、縱方向のしわが内面に残る。
- 用途不明
土製品(67)** (67)は浅い土坑SK05内から出土したものである。底部は平たく、体部は直線的に延び、口縁部でくの字形に折れて端部は傘形に開く。また、体部下方に焼成前に外面から内面へ直径約1cmの穿孔を行う。体部外面は刷毛目かナデで調整し、傘形に開く端部は刷毛目を行う。内面は横方向のナデで調整する。用途は不明であるが、内面の器壁に黒く焦げた痕跡が認められるため、内部で何らかの形で火を用いる容器の可能性が高い。今後の類例の増加を待ちたい。
- 須 惠 器**
(74~96) 須恵器は、坏蓋、坏身、皿、塊、長頸甌、甌、甌、鉢が出土している。前述の様に、上部器に比べて須恵器は実測可能な遺物の数は少ない。しかし、供膳形態、貯蔵形態、調理形態の各種の土器が出土している。
- 坏 蓋**
(74~77) (74)は偏平なつまみを貼りつける。(75)は端部を鋭くしたつまみ大小2つを重ね合わせて貼りつけている。作りはやや粗雑である。(76)は丸みを帯びた天井部で、端部は小さく屈曲する。(77)は平らな天井部で、肥厚した口縁部を有する。
- 坏 身**
(79~81,
83, 84) (79, 81)は、ハの字状に開く高台を持ち、口縁部はやや内彎して立ち上がり、端部は外反させるものである。(81)は口縁下半部に段状の稜を作り出す。(80)は断面四角形の高台にやや丸みをおびた口縁部に外反する端部を持つ。(83)は器高が低く、底部は丸みを帯びて粘土紐の巻上げの痕跡を残す、底部と口縁部の屈曲がはっきりし、口縁部はやや外反する。(84)は器高が低く、底部はヘラ切り痕を残し、未調整である。
- 皿 (85)** 器高は低く、底部はヘラ切りを行い、未調整である。口縁端部は丸く仕上げる。内面から高台部分までヨコナデで仕上げる。
- 塊**
(86, 87,
93~96) 体部に1条の沈線を施すもの(96)と施さないもの(86, 87, 93~95)がある。また、口縁部の直径が13cm内外のもの(93, 94)、口縁部の直径が15cm内外のもの(86, 87, 95, 96)の大小2種類のがある。(86, 87, 95, 96)はSK03の出土である。
- 鉢**
(89~92) 口縁部に比較的明瞭な稜を有するもの(89)、直線的な口縁部に端部を斜めに調整するもの(91)、口縁端部を上方と横につまみ上げるもの

- (90, 92) がある。(91, 92) は SK 04 の出土である。
- 壺 (78) (78) は口縁部が緩やかに外反しながら、端部を上方につまみあげる。
- 甕 (82, 88) (82) は頸部が大きく屈曲し、口縁端部を横につまみだしている。(88) は口縁部が大きく外反する甕である。
- 縄釉陶器 (97~110) 縄釉陶器はほとんどが小破片であり、全体の形がわかるのは3個体しかない。器種には壺、瓶がある。胎土が軟質のもの(97, 104, 105, 108, 110)と硬質のもの(98~103, 106, 107, 109)の2種類がある。
- 壺 (98~110) 脊部で稜ができる、口縁部が外反するもの(98, 99, 102)、稜が明確でないもの(100, 101)がある。底部は糸切り底のもの(99)が1点ある以外はすべて高台を削って作り出している。また、削り出し高台は、輪高台のもの(100, 102, 103~106, 110)と、蛇ノ目高台のもの(107~109)がある。施釉が底部までのもの(102, 104, 105, 106, 108, 109)と、高台付近までのもの(100, 103, 107, 110)がある。釉色は、淡緑灰色~濃緑灰色のものがある。なお、壺と分類した中に皿の高台部分が含まれる可能性はあるが、その差異は破片からでは明確でなく、抽出は困難であった。
- 瓶 (97) 口縁部の破片で、端部は外反し丸くおさめる。胎土は軟質であり、淡赤褐色を呈する。濃緑色の釉がかかること。
- 灰釉陶器 (111~114) 図化可能であったのは、口縁部の4点であった。いずれもやや内轉し、端部が若干外反する。胎土は精良であり、淡灰色を呈している。いずれも焼成状態は良好である。釉色は4点共に淡灰色である。
- 黒色上器 (115~135) 口縁部から底部まで復元可能であったものは3点で、その他は破片であった。壺と皿が出土している。
- 壺 (115~124, 127~135) 口縁部が直線的なもの(115)、口縁部は丸く、端部が外反するもの(116~120)、口縁部が内轉するもの(121~124)がある。また、端部内面が、凹線状に窪むもの(115~117)がある。さらに、口縁部内面の調整では、横方向にヘラ削りをするもの(115~117, 122)、縱方向にヘラ削りをするもの(123)、ヘラで器壁を押さえて調整するもの(188~120, 121)がある。
- 皿 (125, 126) 底部は、高台部分が高く、やや踏ん張った形態で、ヘラ削りの単位が太いもの(121, 127~131)、高台部分が断面三角形で小さく、ヘラ削りの単位が細いもの(132~135)がある。いずれも粘土紐を貼りつけている。
- 上 鍤 3種類の土鍤が遺物包含層、ピットより出土している。調査区全休から出土しており、まとまりは認められない。同一種類のものでも大きさ、

重さともに個体差がある。すべて、土師質である。

有溝十鍾
(136~144) I字型有溝土鍾ともよばれるものである。重さは完形品のもので45.3 g ~ 128.8 g まである。平面型が細長いものから丸いものまである。(141) の土鍾の表面は著しく磨滅し、凹部になっており、砥石状のものとして、二次的に転用されている。

棒状有孔十鍾
(145~154) 大小の大きさに区別できるが、いずれも棒状を呈し、断面円形で、端部に円孔を穿つものである。焼成状態は良好である。

環状十鍾
(155~169) 重量14.7 g ~ 1.7 g とばらつきがある。いずれも棒に粘土を巻きつけて成形している。

蛸壺
(170, 171) 土師質の蛸壺が破片で2個体分、出土している。口縁部は出土していないが、いずれも釣鐘形で環状の把手を有する。焼成状態は良好である。

瓦
(172~174) 須恵質の平瓦が3片出土した。いずれも凹面部は1~5 mm単位の布目压痕を残し、凸面部には繩目压痕がついている。また(172, 173)については、側面部をへらで調整している。胎土には1~3 mm大の砂粒を含み、焼成状態は良好である。

4. S D 0 1
出土遺物
(175~189) S D 0 1からは上師器、須恵器、瓦器、磁器、陶器、銅錢、瓦、石硯等が出土している。遺物は各層中から出土し、層位別による時期差は認められなかった。また、付近の遺物包含層から流れ込んだと思われる古墳~平安時代の遺物が若干出土している。

上師器(176~179, 182) 皿(179, 182)、鍋(176)、羽釜(178)、甕(177)がある。一部の土器を除いて、大半の上器は磨滅していない。

皿
(179, 182) (179)の内面はナデ調整、外面は指おさえの痕跡が残り、外底面が窪んだいわゆる「へそ皿」である。(182)はヨコナデ成形で、底面は糸切り未調整である。口縁端部には灯明皿として使用した灯芯の痕跡が残っている。鍋(176)は胴部外面はたたき目、内面は刷毛目調整を施し、口縁部はヨコ方向のナデで調整している。色調、胎土は良好である。

羽釜(178) 口縁部は内傾し、段を有する。胴部はヘラ状工具で削る。内面は刷毛目調整を行っている。

甕(177) 土師質の甕で、色調は褐色で、焼成状態は不良である。胴部に格子状の叩き目を有する。

須恵器
(186~189) 鉢が出土している。口縁端部の形態が肥厚するもの(186)、端部が肥厚して下方に垂下するもの(187)、口縁端部が丸く、内面に凹部を有するもの(188, 189)がある。

瓦器(181) 皿が出土している。底部外面は指頭圧痕が明瞭に残り、口縁端部は横方向のナデ、内面はナデ調整を行う。

磁 器
(183~185) (183) は高台を高く削り出した白磁である。横田・森田分類の白磁碗V類にあたる。(184) は高台の内側の削り出しが浅い白磁で、上記分類の白磁V類にあたる。(185) は釉が縮んでひびわれており、光沢も無くなっているが、龍泉窯系の無文の青磁碗である。

陶 器
(175, 180) 陶器の摺鉢(175)と皿(180)が出上している。摺鉢は口縁端部は肥厚し下方にやや垂下する。ヘラ状工具で10本単位の条線を彫る。色調は茶褐色である。備前系の摺鉢と思われる。皿の色調は淡赤褐色で、内底面から口縁部外面にかけて横ナデを行う。底部は糸切り底である。

石硯(190) 淡茶褐色の緻密な石質で、上面は丁寧に作っているが、下面の作りは荒い。

銅 錢
(191) SD 0 1 の底面にはほぼ接するような状態で銅錢が出土した。北宋錢の天禧通寶(1017年初鑄)である。錢文は比較的明瞭であるが、遺存状態は、やや悪い。(図33)



図33. 天禧通寶拓影 S=1/1

5. SD 0 2
出土遺物
(191~193) 中世の流路 SD 0 1 が埋没した段階で、流路の幅を約半分に縮小し、石積みによって護岸した溝 SD 0 2 を造っている。堆積土からは陶器器鉄製品、銅錢等が出土している。

磁 器
碗(191) 多量の陶磁器が出土しているが、2点の磁器、1点の陶器を図化した。丸い体部に直立する高台部を持つ。全体に器壁が厚く、不透明な釉が多くかかっているため、製作技術が未熟な印象を受ける。伊万里系の磁器を模倣したものである。

蓋(192) 薄い器壁に厚く施釉されている。内、外面に飛雲文状の文様を描く。江戸時代後期の伊万里の飯茶碗の蓋である。

陶 器
摺鉢(193) 肥厚する口縁部に2条の沈線を有して、多くの条線を有する。色調は赤褐色を呈し、焼成状態は良好である。

銅 錢 堆積土中から寛永通寶が2枚出土した。(図34)



図34. 寛永通寶拓影 S=1/1

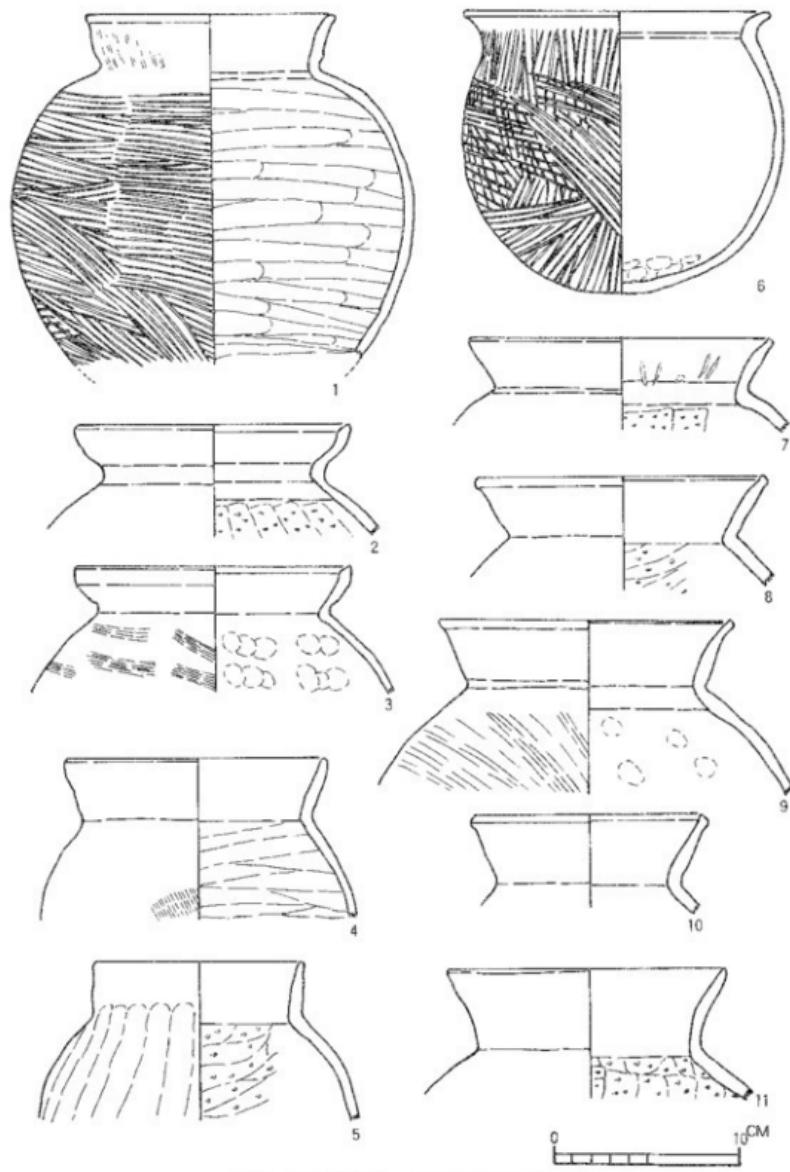


圖35. 暗褐色砂質土、堅穴住居址出土土筋器

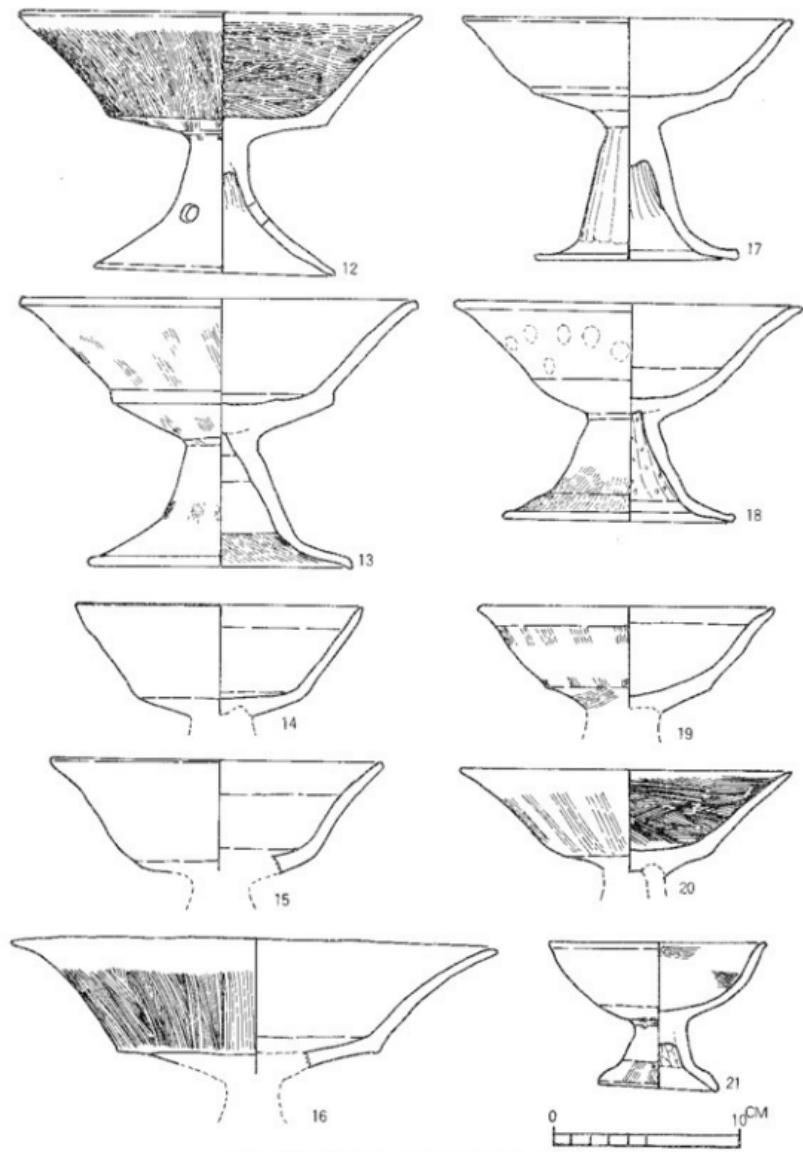


图36. 暗褐色砂质土、竖穴住居址出土土器

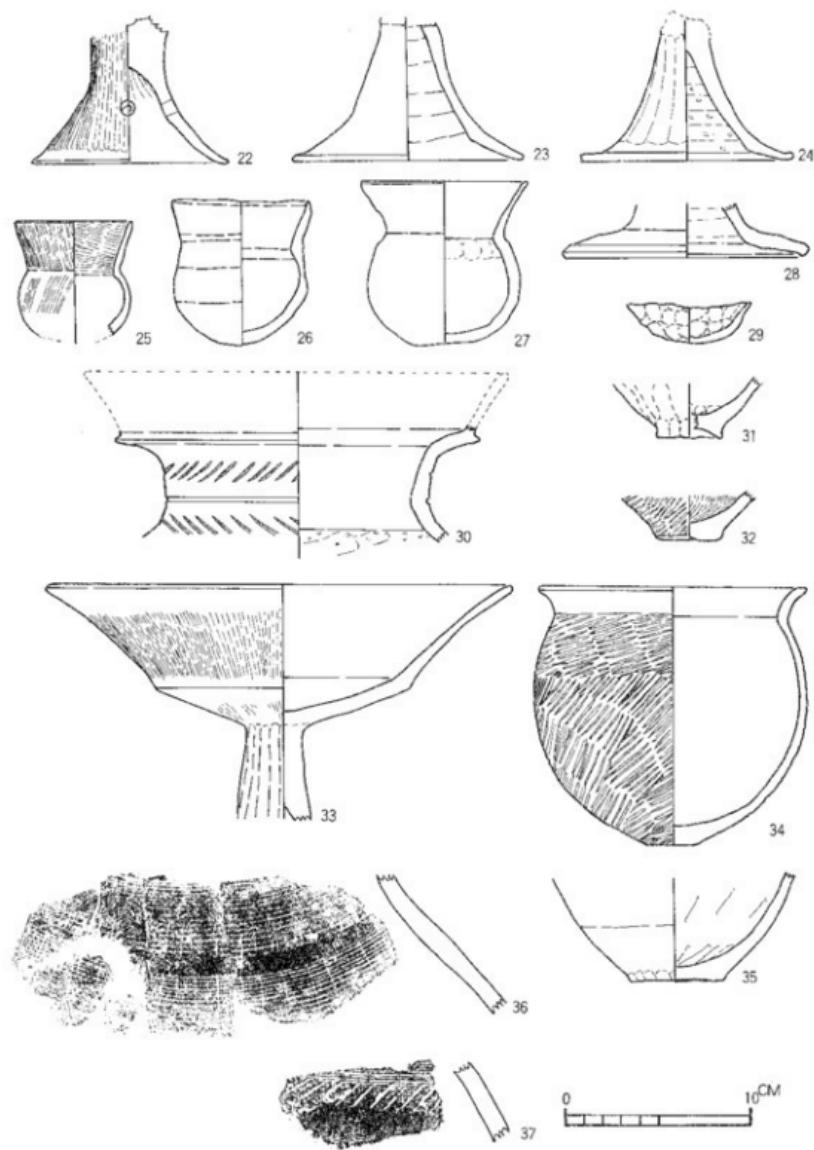


圖37. 暗褐色砂質土、堅穴住居址、土坑出土土師器、弥生土器

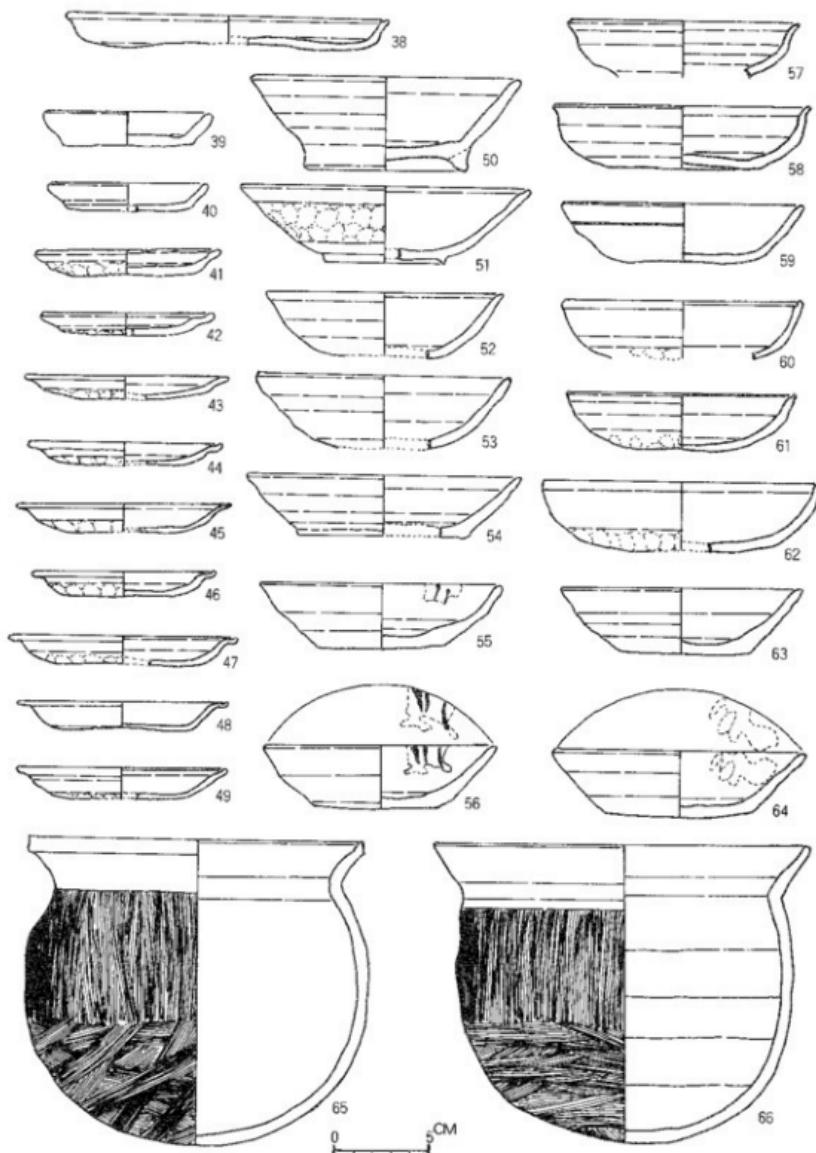


図38. 褐色砂質土、ビット、土坑出土土師器

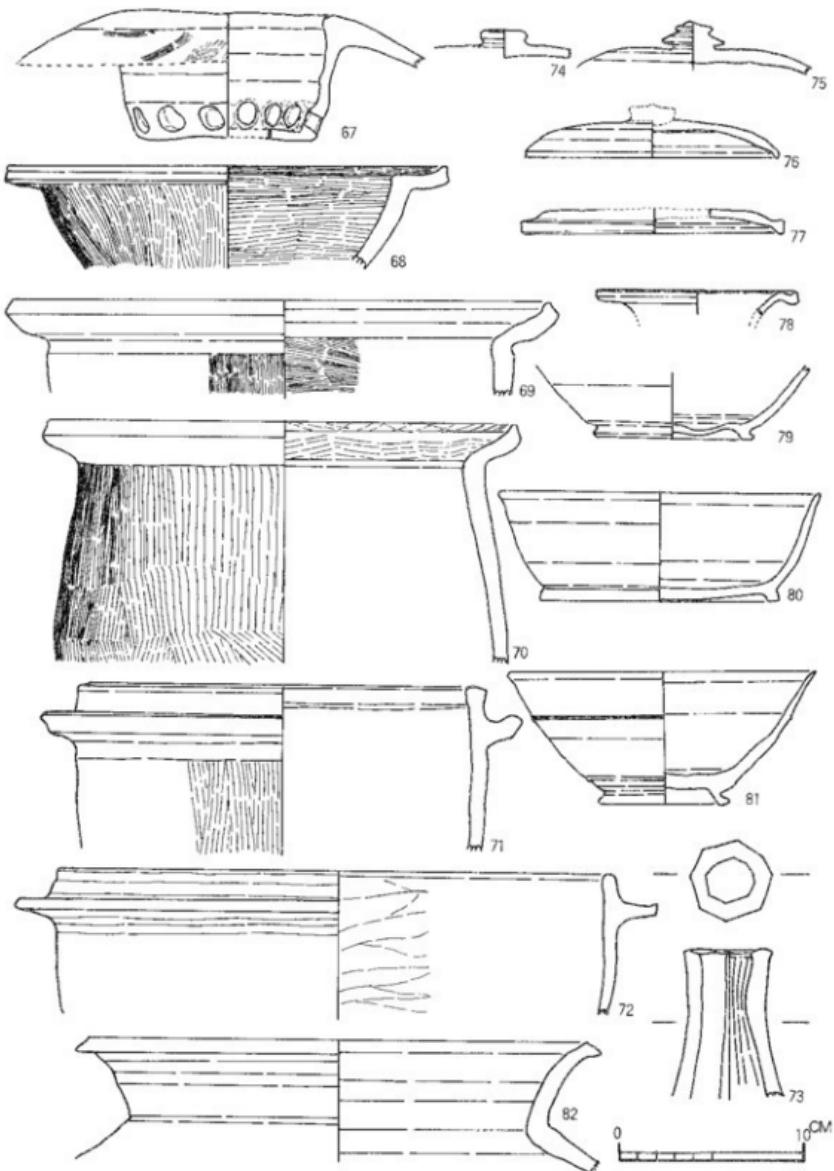


図39. 褐色砂質土、ピット、土坑出土土器、須恵器

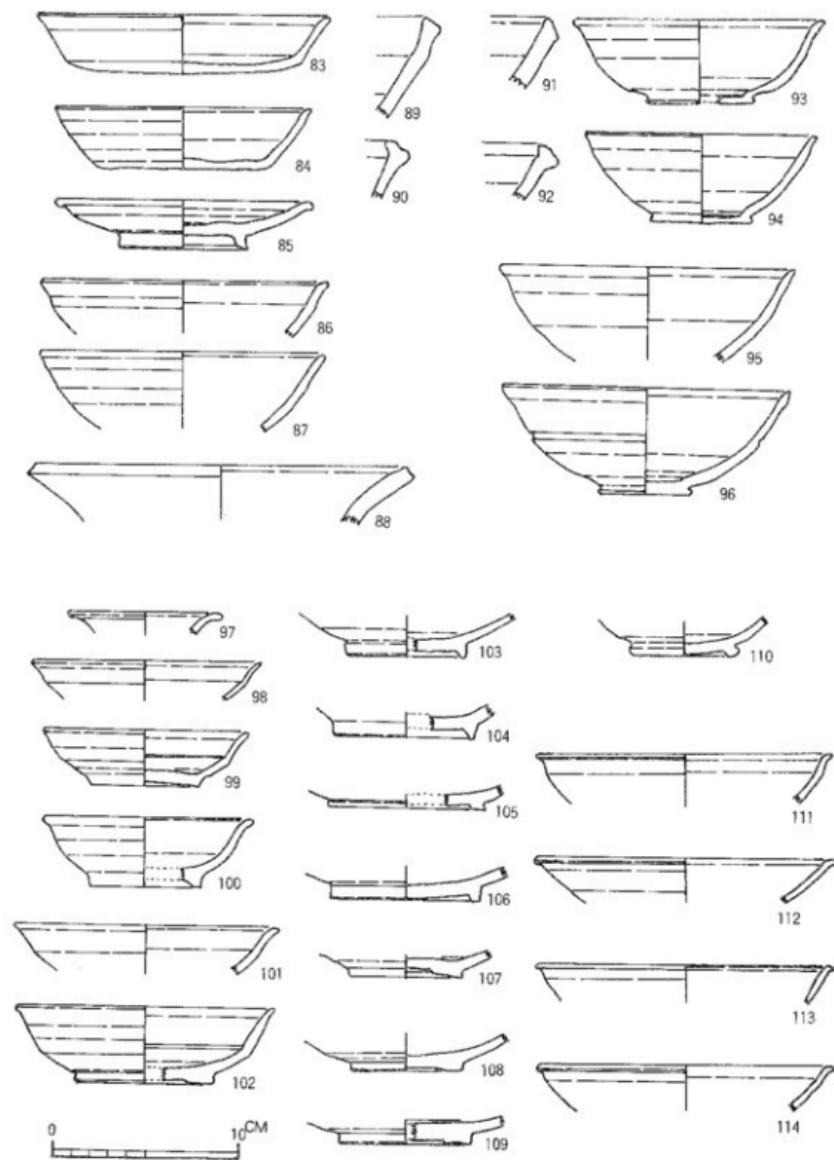


図40. 褐色砂質土、ピット、土坑出土須恵器、縁・灰釉陶器

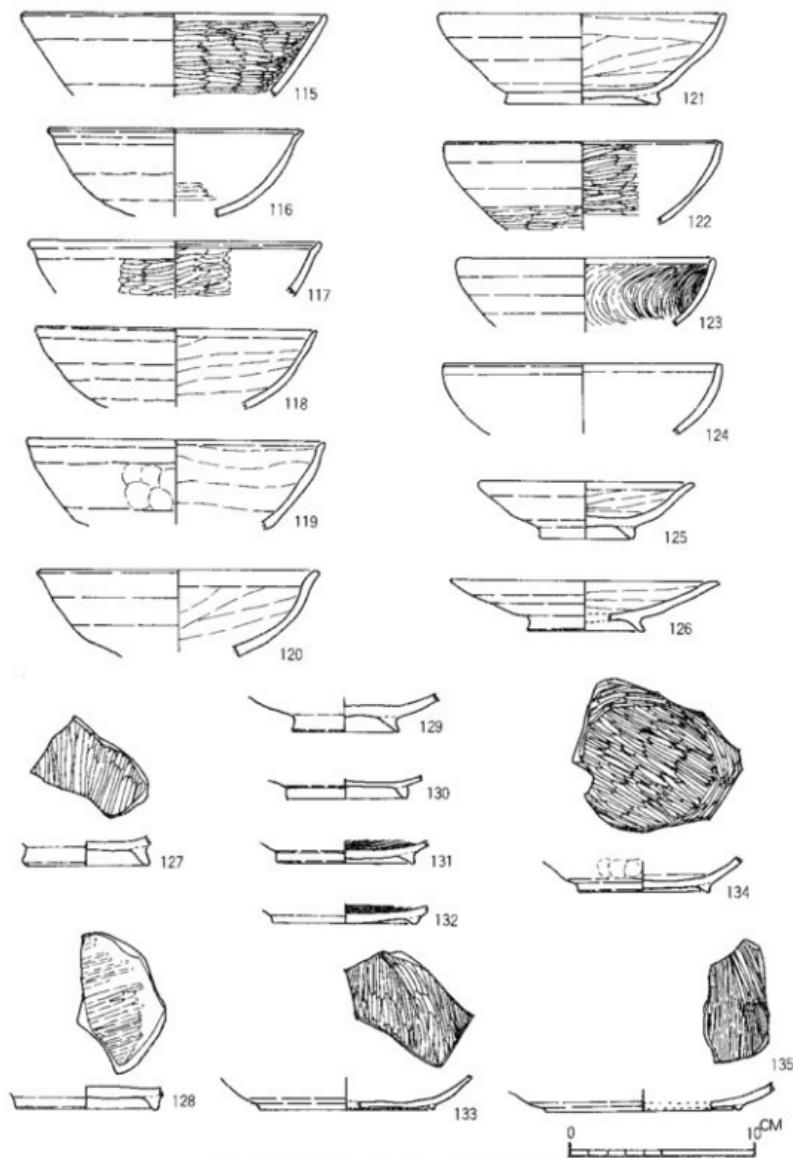


図41. 褐色砂質土、ビット、土坑出土黒色土器

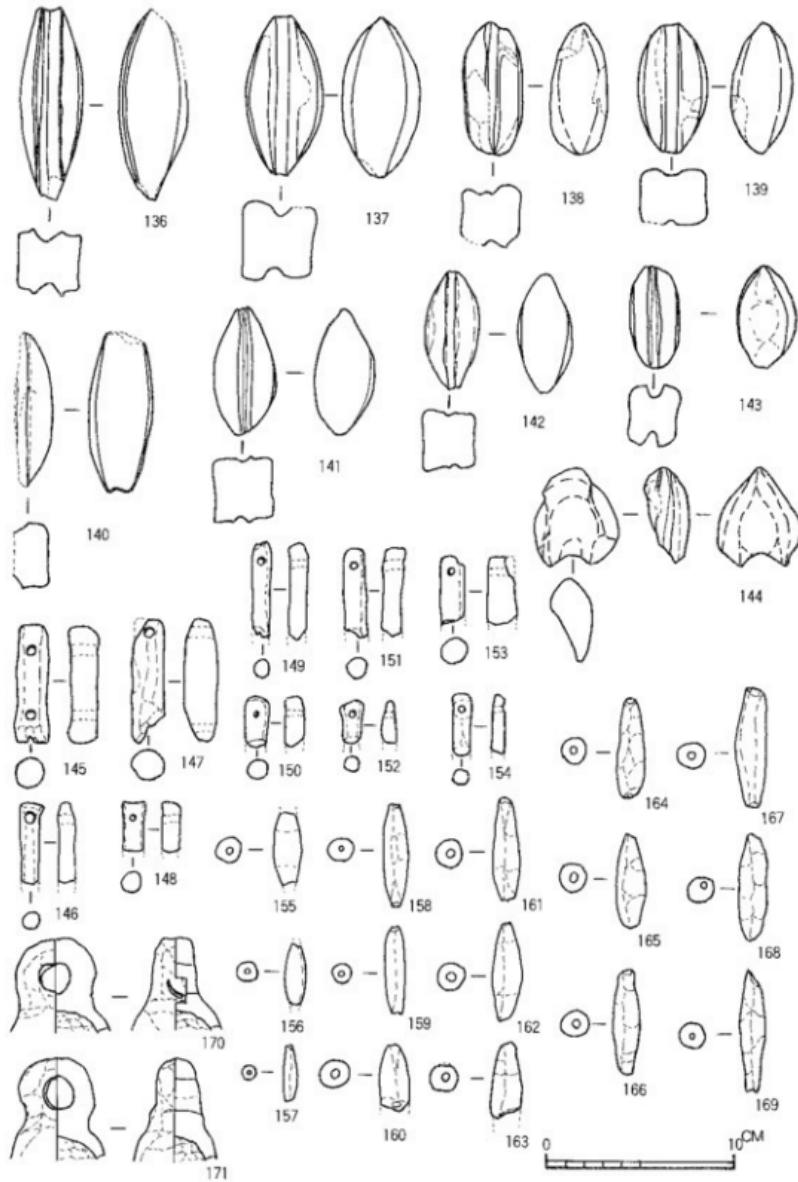
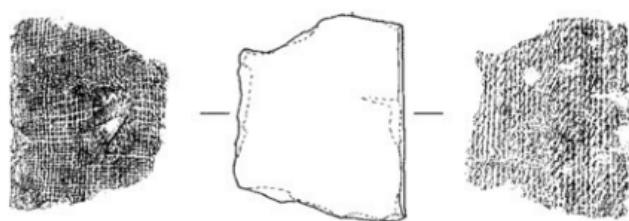
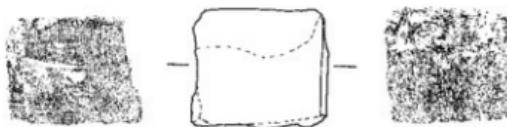


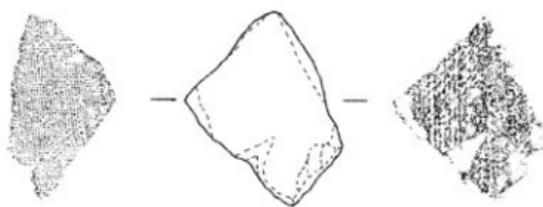
図42. 褐色砂質土、ピット、溝出土土錘、鏃壺



172



173



174



図43. 褐色砂質土、ピット出土瓦

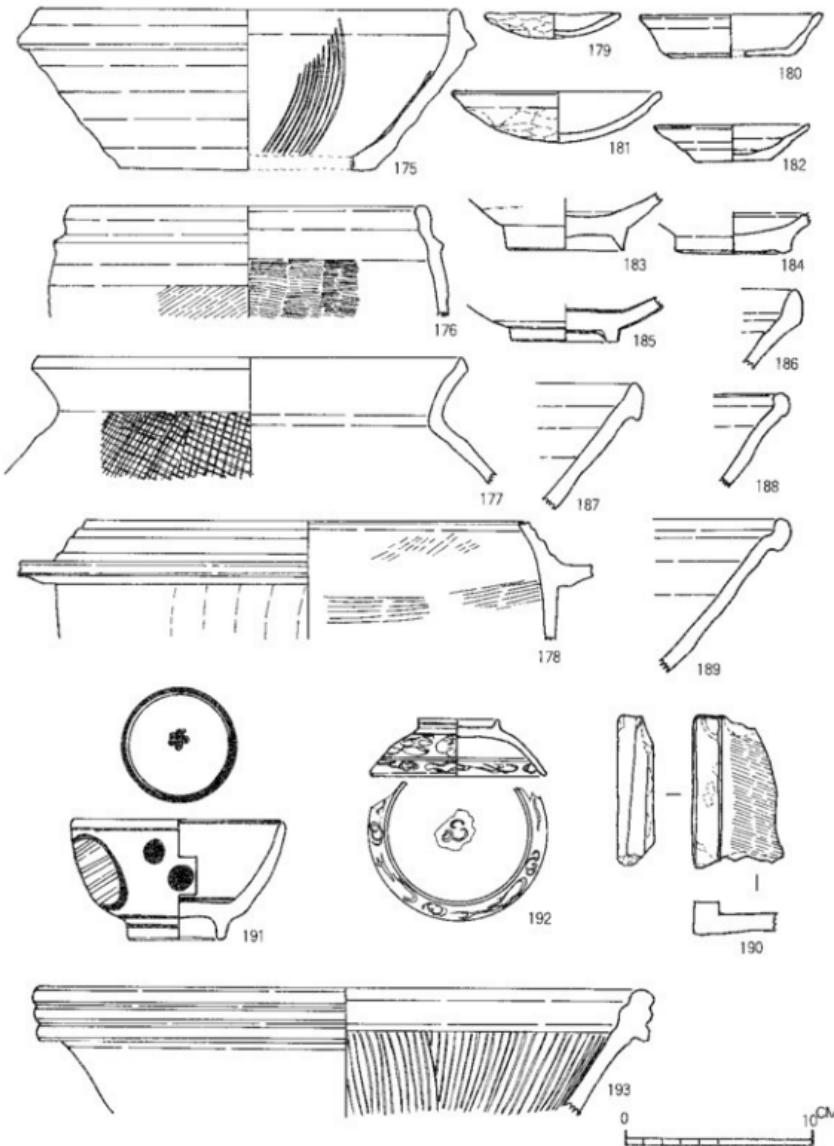


図44. SD 01、02、出土土器、陶磁器、石観

表1. 出土遺物観察表

番号	器種	出土 地区 層位	法量 (cm)	調整手法の特徴	色調	胎土
土 節 器						
1	甕	S B 01 床面直上	口径13.2 器高(18.0)	胴部内面へラ削り 胴部外面刷毛目	淡赤褐色	1~3mm大の砂粒を 多く含む
2	甕	S B 01 埋土上面	口径14.4 器高(5.0)	胴部内面へラ削り 胴部外面ナデ	(外)淡橙色 (内)淡灰褐色	0.5~3mm大の砂粒を 多く含む
3	甕	S B 01 埋土上層	口径14.8 器高(6.9)	胴部内面指頭圧痕 胴部外面刷毛目	淡赤褐色	0.5~1mm大の石英・ 長石・雲母を多く含む
4	甕	S B 01 埋土上面	口径14.0 器高(8.4)	胴部内面へラ削り 胴部外面刷毛目	淡黄褐色	1~2mm大の石英・ 長石・雲母粒を多く 含む
5	甕	B-5 区 暗褐色砂質土	口径11.2 器高(8.4)	胴部内面へラ削り 胴部外面へラ状工具 で押える	淡橙色	0.5~2mm大の石英・ 長石・雲母粒を多く 含む
6	甕	S B 01 埋土	口径16.6 器高15.4	胴部内面上半ナデ 下半指押え 胴部外面荒い刷毛目	淡褐色	0.5~1mm大の石英・ 長石・雲母粒を多く 含む
7	甕	S B 01 埋土上面	口径16.4 器高(6.3)	胴部内面へラ削り 胴部外面ナデ	淡褐色	0.5~1mm大の石英・ 長石・雲母を多く含む
8	甕	S B 02 埋土	口径15.6 器高(6.1)	胴部内面へラ削り 胴部外面ナデ	淡褐色	0.5~1mm大の石英・ 長石・雲母を多く含む
9	壺	S X 01 上層	口径15.8 器高(9.2)	胴部外面刷毛目	淡褐色	0.5~1mm大の石英・ 長石・雲母粒を多く 含む
10	壺	S B 02 埋土	口径13.8 器高(4.7)	被火により不明	淡黄褐色	0.1~1mm大の石英・ 長石・雲母粒を多く 含む
11	壺	S X 01 上層	口径15.2 器高(6.8)	胴部内面へラ削り 胴部外面ナデ	淡褐色	0.5~1mm大の雲母・ クサリ礫・石英・長 石を多く含む
12	高坏	S B 02 埋土	口径22.0 器高14.1	坏部内面 横方向の刷毛目 坏部外面 縱方向の刷毛目	淡褐色	0.5~1mm大の石英・ 長石・雲母を含む
13	高坏	S B 01 埋土	口径21.2 器高14.4	坏部内面 横方向のナデ 外面 刷毛目 脚部内面 刷毛目 外筋 刷毛目、ナデ	淡橙色	精良 細かい雲母片が混じ る程度

番号	器種	出土地区 層位	法量 (cm)	調整手法の特徴	色調	胎土
14	高環	S B 0 2 埋土、床面直上	口徑15.4 器高(6.0)	内外面共にナデ	暗褐色	0.1~1mm大の石英・ 長石・雲母粒を若干含む
15	高環	S X 0 1 上層	口径17.8 器高(6.0)	器壁削離のため 調整不明	赤橙色	0.5~2mm大の石英・ 長石・雲母・クサリ 礫を多く含む
16	高環	S B 0 1 埋土	口径26.0 器高(7.0)	内面横方向のナデ 外面刷毛目	淡橙色	0.1~1mm大のクサリ 礫・雲母・長石を含む
17	高環	S B 0 1 埋土	口径17.8 器高13.2	環部内外面ナデ 脚部へラ削り 端部横ナデ	淡橙色	0.5~1mm大の石英・ 長石・雲母を含む
18	高環	S B 0 1 埋土	口径18.6 器高11.7	内面横方向のナデ 環部外面指頭圧痕 内面へラ削り 脚部外面刷毛目	(内)淡褐色 (外)淡橙色	0.5~1mm大の石英・ 長石・雲母を含む
19	高環	S B 0 2 上層	口径15.8 器高(5.4)	内面横方向のナデ 外面刷毛目	淡橙色	0.1~1mm大の石英・ 長石・雲母を多く含む
20	高環	S X 0 1 上面	口徑18.0 器高(5.5)	内面刷毛目 外面刷毛目のあと軽くナデる	褐色	0.1~1mm大の石英・ 長石・雲母を多く含む
21	高環	S B 0 2 埋土	口径11.8 器高 7.9	内面刷毛目後軽 くナデる 外面横方向ナデ 内面へラ削り 脚部外面刷毛目後軽 くナデる	淡橙色	1~2mm大の石英・ 長石・雲母・クサリ 礫を多く含む
22	高環	B-4 IX 暗褐色砂質土	底径10.6 器高(7.8)	内面横方向のナデ 外面へラ磨き	淡褐色	0.5~1mm大の石英・ 長石・雲母を含む
23	高環	S B 0 1 床面直上	底径12.6 器高(7.8)	内面へラ削り 外向器壁剥離し調整不明	淡橙色	0.1~1mm大の石英・ 長石・雲母を含む
24	高環	B-3、4 IX 暗褐色砂質土	底径11.4 器高(7.8)	内面横方向のへラ削り 外面縱方向のへラ削り	淡橙色	0.1~1mm大の石英・ 長石・雲母を含む
25	小型 丸底壺	S B 0 2 埋土上面	口徑 6.4 器高(6.6)	口縁部内外面刷毛目 内面ナデ 外面刷毛目	淡黄褐色	0.5~1mm大の雲母・ 石英を若干含む
26	小型 丸底壺	S X 0 1 上面	口徑 7.4 器高 7.8	口縁部横方向のナデ 胴部内外面ナデ	淡褐色	0.5~1mm大の石英・ 長石・雲母を多く含む

番号	器種	出土地 層位	法 量 (cm)	調整手法の特徴	色 調	胎 土
27	小型 丸底壺	S X 0 1 埋 土	口径 9.0 器高 8.8	口縁部横方向のナデ 底部ナデ 底部外面粘土紐巻上 げ痕	暗黄灰色	1~2mm大の砂粒を 多く含む
28	高杯	S B 0 2 埋土上層	底径12.8 器高(3.2)	内外面共に横方向の ナデ	淡 橙 色	0.1~0.5mm大の石英 ・雲母を含む
29	手捏 土器	S B 0 1 埋 土	口径 6.8 器高 2.0	内外面共に指おさえ て成形	淡 橙 色	0.1~1mm大の石英・ 長石・雲母を含む
30	壺	S X 0 1 Pit 1	口径22.6 器高(3.2)	口縁部の内外面共に 横方向のナデ 頸部へラ削り	淡 橙 色	0.1~0.5mm大の砂粒 を含む
31	鉢	S B 0 2 埋土上向	口径 8.0 器高(3.0)	内外面共に指押え 内面の一部はナデる	淡 褐 色	0.5~1mm大の石英・ 長石・雲母を含む
32	甕	S D 0 1 より東	口径 7.2 器高(2.4)	内面刷毛目 外面叩キ目	淡 橙 色	0.5~1mm大の石英・ 長石・雲母を多く含 む
33	高杯	P-III 埋 土	口径25.4 器高(12.8)	内面横方向の 坯部 ナデ 外面刷毛目 脚部へラ削り	淡赤褐色	0.1~1mm大の石英・ 長石・雲母・タサリ 繩を含む
34	甕	S K 0 1 埋 土	口径14.8 器高13.9	口縁部横方向のナデ 胸部内面横方向の ナデ 外面叩キ目	淡黄褐色	2~3mm大の白色砂 粒・タサリ繩を多く 含む
35	鉢	S K 0 1 埋 土	口径13.0 器高(5.6)	内面へラ削りの後ナ デ 外面ナデ	淡 橙 色	1~3mm大の砂粒を 含む
弥 生 土 器						
36	壺	E-10区 褐色砂質土	—	内面刷毛目一部ナデ 外面ナデの後施文	黄 褐 色	0.5~1mm大の石英・ 長石・雲母を含む
37	甕	D-1区 暗褐色砂質土	—	内面調整不明 外面ナデの後施文	黄 褐 色	0.5~1mm大の石英・ 長石・雲母を含む
土 師 器						
38	坏	C-5区 褐色砂質土	口径17.6 器高(1.5)	口縁部横方向のナデ 底部外面指押え	淡赤褐色	0.1~0.5mm大の砂粒 を含む
39	皿	Pit 34 埋 土	口径 9.0 器高 1.8	口縁部 底部内面横ナデ 底部外面 回転糸切り未調整	淡赤褐色	0.5~2mm大の石英・ 長石・雲母粒を含む

番号	器種	出土地区 層位	法量 (cm)	調整手法の特徴	色調	胎土
40	皿	E-10区 褐色砂質土	口径 8.6 器高 1.5	口縁部内外面横方向ナデ 底部外面指おさえ	淡橙色	0.5~1mm大の砂粒を 若干含む
41	皿	D-10区 第1邊構面直上	口径10.0 器高 1.3	口縁部内外面横方向ナデ 底部外面指おさえ	淡赤灰色	0.1~0.5mm人の砂粒 を若干含む
42	皿	D,E-11区 第1邊構面直上	口径 9.4 器高 1.2	口縁部内外面横方向ナデ 底部外面指おさえ	淡褐色	精 良
43	皿	Pit 108 掘形埋土	口径11.0 器高 1.3	口縁部内外面横方向ナデ 底部外面指おさえ	淡黃褐色	0.5~1mm大の砂粒を 若干含む
44	皿	Pit 98 埋土上面	口径10.6 器高 1.2	口縁部内外面横方向ナデ 底部外面指おさえ	淡黃褐色	精 良
45	皿	Pit 98 埋土上面	口径11.6 器高 1.5	口縁部内外面横方向ナデ 底部外面指おさえ	淡黃褐色	0.1~0.5mm大のクサ リ穢を含む
46	皿	Pit 26 埋 土	口径10.0 器高 1.4	口縁部内外面横方向ナデ 底部外面指おさえ	淡黃褐色	精 良
47	皿	Pit 26 埋 土	口径12.4 器高 1.5	口縁部内外面横方向ナデ 底部外面指おさえ	淡黃褐色	0.1~1mm人のクサリ 穢・表母を含む
48	皿	Pit 26 埋 土	口径11.4 器高 1.4	口縁部内外面横方向ナデ 底部外面指おさえ	やや赤身 を帯びた 黄褐色	0.1~0.5mm大のクサ リ穢を若干含む
49	皿	Pit 26 掘形埋土	口径11.4 器高 1.6	口縁部内外面横方向ナデ 底部外面指おさえ	淡黃褐色	0.5~2mm大の砂粒を 極く少量含む
50	皿	E-10区 褐色研質土	口径14.6 器高 5.1	口縁部内外面横方向ナデ 底部外面へり切り痕	淡橙色	0.1~1mm大の石英・ 長石・雲母を含む
51	塊	Pit 41 埋 土	口径15.8 器高 4.1	口縁部内外面横方向ナデ 底部外面指おさえ 底部外面ナデ	淡赤褐色	0.5~1mm人の石英・ 長石・雲母粒を多く 含む
52	塊	Pit 318 埋 土	口径13.0 器高 3.4	口縁部内外面横方向ナデ	淡 橙 色	0.5~1mm人の砂粒を 若干含む

番号	器種	法量	法量 (cm)	調整手法の特徴	色調	胎土
53	壺	Pit31 埋土	口径14.0 器高(3.9)	口縁部内外面 横方向のナデ	淡赤褐色	0.5~1mm大の石英・ 長石・雲母を多く含む
54	壺	Pit99 埋土	口径15.0 器高3.3	口縁部内外面横ナデ 底部外面へラ切り	黄褐色	0.1~1mm大の砂粒を 若干含む
55	壺	P-322 (地鎮遺構)	口径13.2 器高3.5	口縁部内外面横ナデ 底部外面へラ切り	暗黄灰色	金雲母・1~5mm大の 砂粒を含む
56	壺	P-140 掘形埋土 (地鎮遺構)	口径12.4 器高3.3	口縁部内外面横ナデ 底部外面へラ切り	黄灰色	雲母・0.1~1mm大の 砂粒を含む
57	壺	E.F-3.4区 第1遺構面上直上	口径12.6 器高(2.7)	口縁部内面 横方向のナデ 外面調整不明	淡橙色	0.5~1mm大の砂粒を 含む
58	壺	Pit320 埋土	口径14.0 器高3.4	口縁部内外面 横方向のナデ 底部外面指おさえ	淡橙色	0.5~1mm大の石英・ 長石・雲母を含む
59	壺	Pit31 埋土	口径13.0 器高3.1	口縁部内外面 横方向のナデ 底部外面指おさえ	淡橙色	0.1~1mm大の石英・ 長石・雲母を含む
60	壺	D-4.5(K) 第1遺構面上直上	口径13.0 器高(3.2)	口縁部内外面 横方向のナデ 底部外面指おさえ	淡黒褐色	精良
61	壺	Pit58埋土 Pit61掘形埋土	口径12.4 器高3.1	口縁部内外面 横方向のナデ 底部外面指おさえ	淡橙色	0.1~0.5mm大の砂粒 を若干含む
62	壺	Pit48 Pit53 掘形埋土	口径14.9 器高(3.7)	口縁部内外面 横方向のナデ 底部外面指おさえ	淡橙色	0.5~1mm大の砂粒を 多く含む
63	壺	P-321 (地鎮遺構)	口径13.4 器高3.5	口縁部内外面横ナデ 底部外面へラ切り	暗黄灰色	金雲母1~2mm大の砂 粒を含む
64	壺	P-321 (地鎮遺構)	口径13.6 器高3.5	口縁部内外面横ナデ 底部外面へラ切り	暗黄灰色	雲母砂粒を若干含む
65	甕	P-193 (地鎮遺構)	口径18.2 器高16.5	口縁部内外面横ナデ 胴部内面調整不明 胴部外面刷毛目	黄褐色	1~5mm大の砂粒を 多量に含む

番号	器種	出土地区層位	法量(cm)	調整手法の特徴	色調	胎土
66	甕	P-194 (地盤遺構)	口径20.2 器高16.1	口縁部内外面横ナデ 胴部内面ナデ 胴部外面刷毛目	淡橙色	1mm大の砂粒、クサ リ塵を若干含む
67	用途 不 明 土製品	SK05 埋土	口径11.8 器高6.8	内面横方向のナデ 外面一部に刷毛目 底部外面ナデ	茶褐色	0.1-1mm大の石英・ 雲母粒を多く含む
68	鍋	Pit26 掘形埋土	口径24.0 器高(5.6)	胴部内面 横方向の刷毛目 胴部外側 統方向の刷毛目	淡赤褐色	0.5-2mm大の砂粒を 多く含む
69	鍋	E-5.6.7区 第1遺構面直上	口径28.8 器高(5.1)	口縁部内外面 横方向のナデ 胴部刷毛目	暗茶褐色	1~2mm大の砂粒を 多く含む
70	鍋	D-5.6区褐色砂 ~褐色砂質土 E-F-3.4区 第1遺構面直上	口径26.0 器高(13.0)	内面刷毛目 口縁部外側 横方向のナデ 内面ナデ 部外面刷毛目	(内)淡褐色 (外)赤褐色	0.5~2mm大の砂粒、 雲母を多く含む
71	羽釜	Pit134 埋土	口径20.0 器高(9.0)	口縁部横ナデ 胴部内面ナデ 胴部外面刷毛目	淡赤褐色	1~3mm大の砂粒を 多く含む
72	羽釜	E-9区 褐色砂質土	口径28.8 器高(7.7)	口縁部横ナデ 胴部外側ナデ	暗赤褐色	1~3mm大の砂粒を 多く含む
73	高坏	D-5.6区 褐色砂~ 褐色砂質土	器高(4.0)	外画へラ切り 内面しづり目の痕跡	淡橙色	0.5~1mm大の砂粒を 極く少量含む
須 惠 器						
74	坏蓋	D-9区 褐色砂質土	口径(7.2) 器高(1.5)	内面 つまみ部分横ナデ 外面一部へラ削り	灰色	精 良
75	坏蓋	E-2区 第1遺構面直上	口径(12.6) 器高(2.5)	つまみ部分横ナデ 内面横ナデ	灰色	0.5mm大の砂粒を若 干含む
76	坏蓋	B-5区 褐色砂~褐色砂質土	口径13.8 器高(2.0)	天井部へラ削りの後 軽くナデ 内面横ナデ	灰色	精 良
77	坏蓋	Pit122 埋土	口径14.2 器高(1.4)	天井部のみへラ削り 内外面横ナデ	淡青灰色	精 良
78	壺	Pit241 掘形埋土	口径11.0 器高(1.3)	内外面共に横ナデ	灰色	精 良

番号	器種	出土地区 層位	法量 (cm)	調整手法の特徴	色調	胎土
79	坏	Pit318 埋土	口径 8.6 器高(3.7)	口縁部 横ナデ 底部内面 ナデ 底部外面回転ヘラ削り	灰 色	0.5~1mm大の砂粒を 若干含む
80	坏身	B-7IK 褐色砂質土	口径17.2 器高 6.0	口縁部 横ナデ 底部内面 ナデ 底部外面回転ヘラ削り	灰 色	0.5~1mm大の砂粒を 極く少量含む
81	坏	C,D-6区 褐色砂一 褐色砂質土	口径16.6 器高 7.1	口縁部 横ナデ 底部内面 ナデ 底部外面回転ヘラ削り	灰 色	0.5~1mm大の砂粒を 極く少量含む
82	甕	西端部 褐色砂一 褐色砂質土	口径26.6 器高 6.5	口縁部内外面横ナデ	暗灰 色	1~2mm大の砂粒を 含む
83	坏身	D-10区 褐色研質土	口径16.0 器高 3.4	口縁部内外面横ナデ 底部内面 横ナデ 底部外面 ナデ	淡灰 色	0.5~1mm大の砂粒を 極く少量含む
84	坏	Pit281 埋土	口径14.0 器高 3.4	口縁部内外面横ナデ 底部外面回転ヘラ切り	灰 色	0.5~3mm大の砂粒を 若干含む
85	皿	Pit318 埋土	口径14.0 器高 2.7	口縁部内面 横ナデ 底部外面ヘラ切り未調整	灰 色	0.5~1mm大の砂粒を 若干含む
86	甕	SK03 埋土	口径15.6 器高(3.0)	内外面共横ナデ	灰 色	0.5~3mm大の砂粒を 若干含む
87	甕	SK03 埋土	口径15.4 器高(4.2)	内外面共横ナデ	灰 色	1~2mm大の砂粒を 比較的多く含む
88	甕	B-3.4区 第1遺構面直上	口径19.8 器高(3.1)	内外面共横ナデ	灰 色	精 良
89	摺鉢	D,E-11区 第1遺構面直上	——	内外面共横ナデ	灰 色	0.5~1mm大の砂粒を 含む
90	摺鉢	D-9区 褐色砂質土	——	内外面共横ナデ	淡青灰 色	1~2mm大の砂粒を 含む
91	摺鉢	SK04 埋土	——	内外面共横ナデ	淡灰 色	1~3mm大の砂粒を 含む

番号	器種	出土地区 層位	法量 (cm)	調整手法の特徴	色調	胎土
92	壺鉢	SK 04 埋土	——	内外面共横ナデ	淡茶褐色	0.1~2mm大の砂粒を 多く含む (全体にざらっとした感じ)
93	壺	P-97 埋土	口径13.6 器高 4.7	内外面共横ナデ 底部 回転糸切り未調整	灰色	0.5~3mm大の砂粒、 淡黒色のマンガン粒 を含む
94	壺	C-5区 褐色砂~ 褐色砂質土	口径12.6 器高 4.9	内外面共横ナデ 底部 回転糸切り未調整	灰色	0.5~1mm大の砂粒を 若干含む
95	壺	SK 03 埋土	口径16.0 器高(5.2)	内外面共横ナデ	(内) 淡青灰色 (外) 淡青灰色	0.5~2mm大の砂粒を 含む
96	壺	SK 03 埋土	口径15.6 器高 5.8	内外面共横ナデ 底部 回転糸切り未調整	灰色	0.5~1mm大の砂粒を 含む
縁 糙 陶 器						
97	瓶	Pit103 埋土	口径 8.2 器高(1.2)	口縁部横ナデ	淡茶褐色	精良
98	皿	Pit107 埋土	口径12.4 器高(2.1)	口縁部横ナデ	灰色	精良
99	壺	Pit320 埋土	口径11.0 器高 3.0	口縁部横ナデ 高台部回転糸切り	ややセピア色の 暗灰色	0.1~3mm大の砂粒を 若干含む
100	皿	D-5.6区 褐色砂~ 褐色砂質土	口径11.2 器高 3.8	口縁部横ナデ 高台部回転ヘラ削り	淡灰色	0.1~0.5mm大の砂粒 を含む
101	皿	E-9区 褐色砂~ 褐色砂質土	口径14.2 器高(2.6)	口縁部横ナデ	灰色	精良
102	壺	E-11区 第1還構面直上	口径14.0 器高 4.2	口縁部横ナデ 高台部回転ヘラ削り	暗灰色 (断面セピア色)	0.5~1mm大の砂粒を 若干含む
103	皿	E.F-3.4区 褐色砂質土	底径 8.4 器高(2.2)	底部横ナデ 高台部回転ヘラ削り	淡灰色	精良
104	皿	B-5.6区 褐色砂質土	底径 7.6 器高(1.3)	底部内面ナデ 高台部回転ヘラ削り	淡黃灰色	0.5~1mm大の砂粒を 含む

番号	器種	出土地区層位	法量 (cm)	調整手法の特徴	色調	胎土
105	皿	Pit57 掘形埋土	底径 8.4 器高(0.8)	底部 横ナデ 高台部回転ヘラ削り	黄灰色	精 良
106	皿	Pit30 埋 土	底径 8.0 器高(2.0)	底部 横ナデ 高台部ヘラ削り	灰 色	0.5~1mm大の砂粒を 若干含む
107	皿	E-2区 第1遺構面直上	底径 6.0 器高(1.2)	底部 横ナデ 高台部ヘラ削り	灰 色	0.5~1mm大の砂粒を 極く少量含む
108	皿	地区不明 褐色砂質土	底径 6.0 器高(2.0)	底部 横ナデ 高台部ヘラ削り	淡黄灰色	0.5~1mm大の砂粒を 極く少量含む
107	皿	地区不明 褐色砂質土	底径 7.2 器高(1.2)	底部 横ナデ 高台部ヘラ削り	灰 色	精 良
110	塊	E,F-1区 褐色砂質土	底径 5.6 器高(1.9)	底部 横ナデ 高台部ヘラ削り	淡黄灰色	精 良
灰 軸 陶 器						
111	塊	E,F-3,4区 第1道構面直上	口径15.8 器高(2.7)	口縁部 横ナデ	淡灰 色	精 良
112	塊	B-3,4,5区 第1道構面直上	口径15.8 器高(2.4)	口縁部 横ナデ	明灰 色	精 良
113	塊	Pit116 埋 土	口径15.6 器高(2.0)	口縁部 横ナデ	淡灰 色	精 良
114	塊	Pit22 埋 土	口径15.4 器高(2.5)	口縁部 横ナデ	淡灰 色	精 良
黑 色 土 器						
115	塊	Pit323	口径16.6 器高(4.5)	口縁部内面ヘラ磨き 口縁部外面横方向のナデ	淡褐 色	0.5~1mm大の砂粒を 含む
116	塊	Pit31 掘形埋土	口径13.8 器高(4.8)	口縁部内面ヘラ磨き 口縁部外面横方向のナデ	淡褐 色	0.5~1mm大の砂粒を 含む
117	塊	E-3,6,7区 第1遺構面直上	口径15.8 器高(3.0)	口縁部内面ヘラ磨き 口縁部外面横方向のナデ	淡褐 色	精 良

番号	器種	出土地区 層位	法量 (cm)	調整手法の特徴	色調	胎土
118	塊	Pit114 掘形埋土	口径15.2 器高(4.4)	口縁部内面へラ磨き 口縁部外面横方向のナデ	淡橙色	0.1~1mm大の砂粒を若干含む
119	塊	Pit140 埋土	口径16.0 器高(4.6)	口縁部内面へラ磨き 口縁部外面横方向のナデ	淡黄褐色	0.5~1mm大の砂粒を含む
120	塊	Pit53 掘形埋土	口径15.0 器高(4.7)	口縁部内面へラ磨き 口縁部外面横方向のナデ	淡黄灰色	0.5~1mm大の砂粒を含む
121	塊	Pit323	口径15.8 器高4.9	口縁部内面へラ磨き 口縁部外面横方向のナデ 高台部 ナデ	(内)黒色 (外)淡褐色	0.5~1mm大の石英・長石・雲母を多く含む
122	塊	Pit323	口径15.0 器高(4.6)	口縁部内面へラ磨き 口縁部外面横方向のナデ	淡橙色	0.5~1mm大の砂粒を含む
123	塊	C-21区 第1還横面上	口径14.0 器高(3.6)	口縁部内面へラ磨き 口縁部外面横方向のナデ	淡橙色	0.5~2mm大の砂粒を含む
124	塊	E-0区 褐色砂質土	口径15.0 器高(3.8)	口縁部横方向のナデ	淡黄褐色	0.5~2mm大の砂粒を含む
125	皿	E,F-3,4区 褐色砂質土	口径11.6 器高3.1	口縁部内面へラ磨き 口縁部外面横方向のナデ 高台部 ナデ	(内)淡黑色 (外)淡灰褐色	0.5~1mm大の石英・長石・雲母を多く含む
126	皿	Pit323	口径14.6 器高2.7	口縁部内面へラ磨き 口縁部外面横方向のナデ 高台部 ナデ	(内)黒色 (外)淡橙色	0.5~1mm大の石英・長石・雲母を含む
127	塊	Pit98 埋土	底径 6.8 器高(1.2)	底部内面へラ磨き 高台内部横方向のナデ	淡褐色	0.5~1mm大の砂粒を若干含む
128	塊	D-3区 第1還横面上	底径 7.6 器高(1.2)	底部内面へラ磨き 高台内部横方向のナデ	淡橙色	1mm大の砂粒を若干含む
129	塊	Pit25埋土 掘形埋土	底径 6.0 器高(1.2)	底部内面ナデ 高台部横方向のナデ	淡橙色	0.5~1mm大の砂粒を含む
130	塊	E-5,6区 褐色砂質土	底径 6.4 器高(1.0)	底部内面ナデ 高台部横方向のナデ	淡橙色	精良

番号	器種	出土地区層位	法量 (cm)	調整手法の特徴	色調	胎土
131	塊	Pit45埋土 掘形埋土	底径 7.4 器高(1.2)	内面ヘラ磨き 高台部横方向のナデ	淡褐色	0.5~1mm人の砂粒を若干含む
132	塊	Pit15 掘形埋土	底径 7.6 器高(1.0)	内面ヘラ磨き 高台部横方向のナデ	淡橙色	0.5~1mm人の砂粒を若干含む
133	皿	耕土	底径 9.6 器高(1.7)	内面ヘラ磨き 外面器壁荒れのため 調整不明	淡褐色	1mm大の砂粒を若干含む
134	塊	耕土	底径 6.0 器高(1.8)	内面ヘラ磨き 高台部横方向のナデ 脇部指おさえ	淡褐色	1~2mm大の砂粒を比較的多く含む
135	皿	Pit235 埋土	底径10.4 器高(1.2)	内面ヘラ磨き 高台部横方向のナデ	淡橙色	0.5~1mm大の砂粒を含む
土錘						
番号	種類	出土地区層位	法量 (cm)	色調	胎土	重量
136	有溝土錘	C・D-1区 褐色砂質土	全長10.4 巾 3.4	淡黄褐色	0.5~1mm大の砂粒を若干含む	121.3g
137	有溝土錘	F-3区 第1造構面直上	全長 8.7 巾 4.4	淡褐色	1~4mm大の砂粒を含む	128.8g
138	有溝土錘	C・D-1区 褐色砂質土	全長 7.4 巾 3.4	淡赤褐色	1~5mm大の砂粒を含む	71.9g
139	有溝土錘	C・D-1区 褐色砂質土	全長 7.0 巾 3.2	褐色	1~2mm人の砂粒を多く含む	74.2g
140	有溝土錘	P-29 掘形埋土	全長(8.4) 巾 3.4	淡黄褐色	0.5~1mm大の砂粒を若干含む	(61.6g)
141	有溝土錘	D-6区 第1造構面直上	全長 6.8 巾 3.4	淡茶褐色	0.5~1mm大の砂粒を含む	70.3g
142	有溝土錘	D-5.G区 褐色砂~ 褐色砂質土	全長 6.4 巾 3.2	淡赤褐色	0.5~1mm大の砂粒を若干含む	50.8g

番号	種類	出土地区 層位	法量 (cm)	色調	胎土	重量
143	有溝土鍤	Pit62 埋土	全長 5.6 巾 3.4	淡褐色	0.5~1mm大の砂粒を含む	45.3g
144	有溝土鍤	Pit43 埋土	全長 5.4 巾 4.4	褐色	1~3mm大の砂粒を多く含む	(37.2g)
145	棒状土鍤	E-11区 第1遺構面直上	全長 6.2 巾 1.6	褐色	1~2mm大の砂粒を含む	26.8g
146	棒状土鍤	D-1区 褐色砂質土	全長(4.2) 巾 0.9	淡褐色	精良	(7.3g)
147	棒状土鍤	D-11区 小溝	全長(6.6) 巾 1.7	淡赤褐色	1~2mm大の砂粒を多く含む	(26.1g)
148	棒状土鍤	試掘トレンチ 褐色砂質土	全長(2.6) 巾 1.1	淡赤褐色	1~2mm大の砂粒を若干含む	(5.2g)
149	棒状土鍤	P-26 埋土	全長(5.2) 巾 0.9	淡褐色	精良	(7.5g)
150	棒状土鍤	C・D-1区 褐色砂質土	全長(2.6) 巾 1.0	淡褐色	0.5~1mm大の砂粒を若干含む	(4.4g)
151	棒状土鍤	D-6区 第1遺構面直上	全長(4.8) 巾 1.1	淡褐色	精良	(8.9g)
152	棒状土鍤	D-10区 暗褐色砂質土	全長(2.3) 巾 0.7	淡褐色	精良	(2.6g)
153	棒状土鍤	P-94 掘形埋土	全長(3.6) 巾 1.4	淡赤褐色	1~3mm大の砂粒を多く含む	(10.7g)
154	棒状土鍤	D-0区 褐色砂~ 褐色砂質土	全長(3.6) 巾 0.8	黄灰褐色	精良	(3.5g)
155	環状土鍤	P-55 埋土	全長 3.7 巾 1.4	黒褐色	精良	7.4g

番号	種類	出土地区 部位	法量 (cm)	色調	胎土	重量
156	環状土鍤	D-11区 第1造構面直上	全長 3.2 巾 1.2	淡赤褐色	精 良	3.4g
157	環状土鍤	E.F-3.4区 褐色砂質土	全長 3.0 巾 0.8	淡褐色	0.5~3mm大の砂粒を若干含む	1.7g
158	環状土鍤	P-30 掘形埋土	全長 5.4 巾 1.4	淡黃褐色	0.5~1mm大の砂粒を多く含む	9.3g
159	環状土鍤	P-87 掘形埋土	全長 4.6 巾 1.0	淡黃褐色	1~2mm大の砂粒を含む	5.7g
160	環状土鍤	P-235 埋 土	全長 (3.6) 巾 1.6	淡褐色	0.5~1mm大の砂粒を含む	(8.1g)
161	環状土鍤	P-30 掘形埋土	全長 5.4 巾 1.4	淡褐色	1~2mm大の砂粒を多く含む	10.5g
162	環状土鍤	E.F-1区 褐色砂質土	全長 5.3 巾 1.4	淡褐色	0.5~1mm大の砂粒を若干含む	10.1g
163	環状土鍤	D-6区 第1造構面直上	全長 (4.0) 巾 1.6	淡褐色	1~2mm大の砂粒を含む	(9.3g)
164	環状土鍤	D-2区 埋 土	全長 5.4 巾 1.4	淡橙色	精 良	(11.4g)
165	環状土鍤	E-1区 小 溝	全長 5.0 巾 1.5	淡橙色	0.5~1mm大の砂粒を含む	11.0g
166	環状土鍤	E-1.2区 第1造構面直上	全長 5.6 巾 1.4	黄灰色	精 良	10.7g
167	環状土鍤	E.F-3.4区 第1造構面直上	全長 6.4 巾 1.6	淡黒褐色	0.5~1mm大の砂粒を多く含む	(14.7g)
168	環状土鍤	D-1区 小 溝	全長 5.6 巾 1.4	暗茶褐色	精 良	12.5g

番号	種類	出土地区 層位	法量 (cm)	色調	胎土	重量
169	環状土錐	Pit32 掘形埋土	全長 6.6 巾 1.4	黄灰色	精良	(10.7g)
銷 壺						
170	銷 壺	D-E-11区 第1遺構面直上	器高 5.0	淡黄灰色	1~2mm大の粒を多く含む	(58.6g)
171	銷 壺	D-E-11区 第1遺構面直上	器高 5.5	淡橙色	1~2mm大の砂粒を多く含む	(67.1g)
瓦						
番号	器種	出土地区 層位	法量	調整手法の特徴	色調	胎土
172	平瓦	D-0区 褐色砂質土	—	凹面 布目压痕 凸面 繩目压痕 端面 ヘラ切り	灰色	1~3mm大の砂粒を多く含む
173	平瓦	P-316 掘形埋土	—	凹面 布目压痕 凸面 調整不明 端面 ヘラ切り	灰色	1~3mm大の砂粒を多く含む
174	平瓦	P-45 掘形埋土	—	凹面 布目压痕 凸面 繩目压痕	灰色	1~3mm大の砂粒を多く含む
陶 器						
175	摺鉢	E-8区 SD01 埋土	口径22.4 器高 8.7	内外面 横ナデ ヘラ状工具で条線を入れる	茶褐色	1~5mm大の砂粒を多く含む
土 節 器						
176	鍋	D-8区 SD01	口径19.2 器高 6.0	口縁部横方向のナデ 胴部内面 刷毛目 胴部外面 叩キ目	淡褐色	1~2mm大の砂粒を多く含む
177	甌	E-9区 褐色砂～ 褐色砂質土	口径23.0 器高 6.5	口縁部横方向のナデ 外面 叩キ目	褐色	1~2mm大の砂粒を多く含む
178	羽釜	SD01	口径24.0 器高 6.4	口縁部横方向のナデ 胴部内面刷毛目 胴部外面ヘラ削り	淡黑色	0.5~1mm大の砂粒を多く含む
179	皿	E-8区 SD01	口径 7.6 器高 1.3	内外面指押え成形	淡褐色	1~2mm大の砂粒を含む
陶 器						
180	皿	E-8区 SD01	口径 9.8 器高 2.3	口縁部 横ナデ 底部外面 回転系切り未調整	淡赤褐色	0.5~1mm大の砂粒を含む

番号	器種	出土地区 層位	法量 (cm)	調整手法の特徴	色調	胎土
瓦 器						
181	皿	B.C-9区 SD 01	口径11.6 器高 2.8	口縁部横方向のナデ 内面 ナデ 底部外面指おさえ	淡褐色 ~淡黒色	精 良
土 師 器						
182	皿	D-8区 SD 01	口径 8.4 器高 2.0	口縁部 横ナデ 底部回転糸切り未調整	淡黄灰色	精 良
青 磁・白 磁						
183	白磁碗	D-8区 SD 01	底径 6.4 器高(2.9)	内面 横ナデ 外面 ヘラ削り	灰白色	精 良
184	白磁碗	D-8区 SD 01	底径 6.4 器高(2.2)	内面 横ナデ 外面 ヘラ削り	白色	精 良
185	青磁碗	D-8区 SD 01	底径 6.0 器高(2.0)	内面 横ナデ 外面 ヘラ削り	淡茶褐色	精 良
須 惠 器						
186	摺鉢	D-9区 SD 01	—	内外面共に横ナデ	青灰色	1~3mm大の砂粒を若干含む
187	摺鉢	SD 01	—	内外面共に横ナデ	灰 色	1~2mm大の砂粒を多く含む
土 師 器						
188	摺鉢	D-8区 SD 01	—	口縁部内外面 横方向のナデ 内面 調整不明	淡褐色	0.5~1mm大の砂粒を多く含む
須 惠 器						
189	摺鉢	排水溝 褐色砂~ 褐色砂質土	—	内外面共に横ナデ	灰 色	1~2mm大の砂粒を多く含む
染 付						
190	碗	SD 02 上層	口径11.4 器高 6.5	施釉のため調整不明	灰 色	精 良
191	碗蓋	SD 02 西側セクション	口径 9.6 器高 3.0	施釉のため調整不明	白 色	精 良
陶 器						
192	摺鉢	D-7区 SD 01上層	口径33.0 器高(6.8)	口縁部 横ナデ 外面 ヘラ削り	赤褐色	1~3mm大の砂粒を多く含む

6. 金属器

金属製品は合計46点出土している。その内訳は、銅鏡1、銅鏡4、鉄釘10本、板状不明鉄器7点、タガネ状鉄器1点、鉄刀(?)1点、鎧滓3点、不明鉄片19点である。大半が平安時代の包含層、柱穴から出土している。

- 鉄刀(?) (1) は関部から刀身(?)にかけての破片である。断面は片刀を呈する。芯部分は欠損しているが、切先方向は、端部がしっかりとおり欠損しているとは見られない。本来がこの端部であれば、刀とは言えないが、折れた後に2次整形し小刀として使用していたとも考えられる。
- 釘 今回の出土で最も多い製品である。欠損している場合が多く、本米の長さは不明であるが、断面形状や幅は様々である。
- (2) は、断面長方形で頭部は不明瞭である。(3)と(5)の断面は正方形に近い。(4)と(6)の断面は梢円形を呈する。
- タガネ状鉄器 (9) は残存長14cm、最大幅1.6cm、厚さ1.0cmを測る。推定20cm程度のタガネ状の鉄器と考えられる。
- 板状不明鉄器 板状不明鉄器7点のうち、図化した3点については、何らかの製品の一部と考えられる。他の4点は、劣化に起因するとも考えられるが、その表面はていねいな整形を受けたとは考えにくく、鉄素材とも考えられる。
- (8) はコーナ部分の破片である。本来の形状や多きさはまったく推定できない。稜線部分は緩やかなカーブを描いており、この穂や表面及び

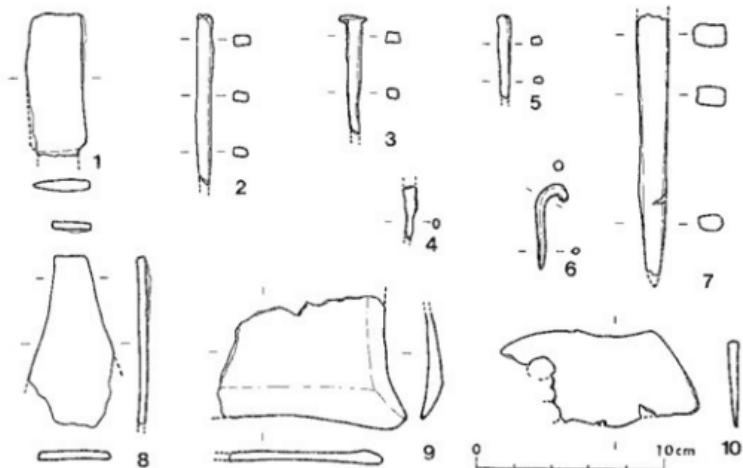


図45. 金属器実測図

断面を見る限りでは、鉄造品の可能性がある。(9)は、厚さ0.4cmではほぼ均一である。肉眼的には、(8)とはほぼ同様で鉄造品の可能性もある。一部に銅を起因とする錆も認められる。(10)も、本来の形状が不明であるが、最大厚0.4cmで、片刀状を呈する。径1.5cm程度の小孔を2ヶ所に持つが、劣化が著しく明瞭さを欠く。これも銅を起因とするが錆が顕著にみられる。

銅鏡

合計4点出土している。内訳は延喜通寶1点、寛平大寶3点である。延喜通寶は直径2.0cm、重量2.77gで、寛平大寶(1)は直径1.9cm、重量0.73g一部欠損しているが、同(2)は直径1.9cm、重量0.59gで1/3程度欠損している。同(3)は推定直径1.9cm、重量0.2gで1/5程度の破片である。

非破壊分析による 材質調査

今回分析に供する資料は、建物柱穴から出土した延喜通寶1点と寛平大寶3点、近世擾乱土層から出土した古墳時代の銅鏡1点である。

分析にあたっては、奈良国立文化財研究所の沢田正昭、肥塚隆保氏により、同所の螢光X線分析装置で行った。

銅鏡

試料①の銅鏡は全体を緑色の平滑な錆が被っているものの、さほど劣化は進行していない。この表面の分析の結果、主成分として銅、錫、鉛を検出している。若干ではあるが、砒素、鉄、銀も検出した。銅の含有量が高く、良質な青銅製品であったことが窺える。

延喜通寶

試料②の延喜通寶は、色調は暗褐色を呈しており、錆による表面の劣化は顕著ではない。半定量分析の結果、鉛が約90%、砒素が約10%、その他に銀、鉄を若干検出した。銅、錫については、ほとんど検出していない。これは錆の侵食により、表面近くの銅が劣化したことによる可能性もあるが、極端な銅の流失も想定し難く、本来の銅、錫が存在していても極めて微量であったと考えられる。

寛平大寶

試料③の寛平大寶は、試料②に比してより劣化が進行しており、色調は僅かに緑色を帯びた白色を呈している。分析の結果、鉛が約80%、銅が約5%、砒素約17%と鉄を若干検出した。大半を鉛が占めており、錫はほとんど認められなかった。やはり試料②と同様、本来の銅、ズの含有量が少なかったと考えられる。

試料④の寛平大寶の色調は、試料③と同様に緑白色を呈している。分析の結果、鉛約50%、銅約30%、砒素約15%と鉄を若干検出した。

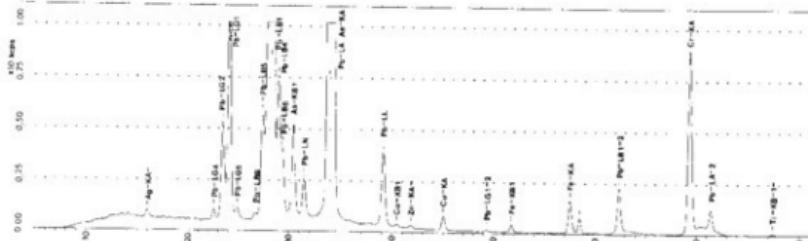
試料⑤の寛平大寶は、劣化状態や色調などの肉眼的観察では試料③④と同程度である。分析の結果、鉛約43%、銅約35%、砒素約16%と若干の鉄を検出した。

以上の定性分析から推測できる点を列挙してみる。まず、試料③～⑤は、別個体3点の寛平大寶であるが、その表面錆の含有主成分に共通す

る点は、i. 銅よりも鉛の方が含有比率が高く、特に試料③について顕著である。ii. 硅素が約15%～17%とはほぼ一定している。iii. 微量元素として鉄や銀などを含むなどの点が挙げられる。さらに試料②（延喜通寶）と③～⑤（寛平大寶）を比較してみると、まず共通点としては、i. 錫がほとんど認められない。ii. 鉛を主体とする、iii. 微量の銀を含む、iv. 銅の含有量が極めて少ないなどの諸点がある。次に相違点としては、試料②で銅をほとんど含まない点が注目される。

これまでの皇朝十二銭の分析結果からは、承和昌寶（835）以降、錫／鉛の含有量比がそれ以前の皇朝十二銭に比して小さくなり、錫の低下と鉛の増加が皇朝十二銭後半の傾向であることが指摘されている。今回の分析結果はこの傾向に合致するものの、これまでの分析結果の比率を下回る可能性が高く、成分的には粗悪な銅銭であったと考えられる。

ただし、これは試料表面の錫の定性分析であり、本来の組成をそのまま反映したものではないため、粗悪な貨幣であることは推定できるものの、その程度や鑄造地を断定することはできない。しかし、今回試料とした延喜通寶、寛平大寶は、ともに銅をほとんど含まず鉛を主体とする貨幣であることはほぼ間違いない、今後の同種銭の分析例の増加によって、本試料が私鑄銭であるか否かについても判明するものと思われる。



註

- (1) 西川宏「武器」『日本の考古学』V 河出書房新社 1966
- (2) 梅原末治「神戸市夢野丸山古墳」『兵庫県史蹟名勝天然紀念物調査報告書』2 1925
- (3) 横田賢次郎・森田勉「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4 1978
- (4) (3)同じ
- (5) 近世磁器については、神戸市立博物館、岡泰正氏の御教示を得た。
- (6) 沢田正昭「遺物の非破壊調査法—金属製造物の材質分析—」『昭和60年度保存科学研究集会—埋蔵文化財の材質・構造、ならびに保存環境に関する研究』奈良国立文化財研究所 1986

第VII章 まとめ

今回の調査で、日暮遺跡周辺は弥生時代～明治時代に至るまでの遺構・遺物が発見された。本章では、検出・出土した遺構、遺物を弥生時代、古墳時代、平安時代、鎌倉・室町時代、江戸・明治時代の時期区分に大別して要約し、若干の考察を加えて、まとめたい。

1. 弥生時代 遺 物

暗褐色砂質土より弥生上器が2片出土した(図37.№36,37)。これらの土器は弥生時代中期に属するものである。

しかし、同時期の遺構は調査区内には存在せず、近接した地点に弥生時代の遺構が存在するものと考えられる。

2. 古墳時代 遺 構

堅穴住居址2棟、堅穴住居址状遺構1箇所、土坑、ピットを確認した。堅穴住居址については、いずれも方形の平面プランで、周壁溝を持たないもの(SB01)と周壁溝を持つもの(SB02)がある。また、いずれの住居址も、現存する範囲内あるいは調査範囲内では、竪は確認されなかった。

住居址の床面には遺物はほとんど残っておらず、その堆積土中から大量の遺物が出土した。

また、堅穴住居址状遺構SX01は、方形の遺構であるが、柱穴のまとまりが無く、またその深さも浅いため、住居址と考えるにはどの様な上屋の構造が想定できるのかは不明である。しかし、遺構検出段階で多くの遺物がこの付近で出土し、その出土の状況がSB01, 02と近似していることや、方形の平面プランであることから、住居址である可能性が高い。

遺 物

古墳時代の遺物の大半はSB01, 02, SX01の堆積土中より出土し、遺物包含層からの出土した破片は少なく、細片化したものが多い。出土遺物のうち、土器はすべて上師器であり、甕、壺、高环形上器については数種の分類が可能であった。また、高环形上器の復元可能な数が他の器形のものに比べて多かった。

遺物の特徴として、次のことが挙げられる。(1)甕の内面にヘラ削りが入ること。(2)口縁端部に面を形成するという様な布留式の甕の典型的なもののが少なく、広口甕的な形態のものの量が多くなってきていること。(3)須恵器は共伴しないことなどである。

以上の点から考えて、これらの遺物の時期は、布留式土器併行段階最末期、あるいはその段階の直後の時期のものと思われるが、当地域でのこれらの土器の詳細については不明確であり、今後なお検討を要する。

市内の布留式
土器併行段階
前後の遺跡

現在までに確認されている、市内の布留式土器併行段階あるいはその直後の集落遺跡は、中央区・生田遺跡^②、北区・宅原遺跡^③、西区・吉田南遺跡^④、西区・長坂遺跡^⑤の計4箇所である。これらはいずれも限定された面積の調査であるため、その集落の規模が判明した例はない。

昭和62年度に調査された中央区・生田遺跡では、堅穴住居址2棟、掘立柱建物址6棟が検出されている内で、5世紀後半の方形で竈を有する堅穴住居址が1棟確認されている。北区・宅原遺跡有井地区および辻垣内地区では、布留式併行段階の堅穴住居址が発見されている。西区・吉田南遺跡では弥生時代～中世までの複合遺跡であるが、その中に該当時期の堅穴住居址が検出された。西区・長坂遺跡においても、この段階直後の堅穴住居址が確認されている。

3. 平安時代

12棟の掘立柱建物址、土坑、溝状遺構、ピットが確認された。また、地鎮遺構が6箇所、検出された。

遺構
掘立柱建物址

12棟の掘立柱建物址が確認されている。これらの建物は重複して建てられており、柱穴の前後関係や出土遺物により、およそ6時期の建て替えがあるものと考えられる。

第1期

S B 0 3 が単独で建築されている時期である。時期の確証は欠くが、建物の前後関係から考えて、9世紀段階と推定される。

第2期

S B 0 4, 0 5 の2棟の建物が存在している。S B 0 4 は東西2面廻の規模の大きな建物である。またS B 0 4 には地鎮遺構が2～3箇所伴う可能性がある。その内の地鎮遺構P-3-2-2から寛平大寶が出土している。その初鑄の年代は890年であるので、この建物の建築直前あるいはその直後にこれらが埋納されたものであるならば、この建物の時期はおよそ9世紀末から10世紀初頭段階であると考えられる。

第3期

S B 0 6, 0 7 の2棟の建物が存在する時期である。S B 0 7 は、S B 0 4 の規模を継承している建物である。この建物の柱穴であるP-2-6 の掘形から、延喜通寶(907年初鑄)が出土した。この貨幣が地鎮のためにこの建物の建築時に埋納されたものとすれば、建物の存在していた時期は10世紀の前半頃と考えられる。

第4期

S B 0 8, 0 9 の2棟の建物が存在している。出土した遺物から考えてこの建物は10世紀代には存在していたと推定される。

第5期 やや建物方位の異なる2棟の建物SB10, 11が建っている時期である。SB10の柱穴埋土からは、東播系の須恵器塊(図40Na93)が出土している。SB10出土の須恵器塊の時期については、11世紀後半～末と考えられており、建物の存在する時期の下限については、上記の時期が妥当であろう。

第6期 SB12は桁行5間、梁行2間の建物であり、第1期～5期までの建物とは様相が異なっている。まず、柱穴の掘形の大きさが、他の建物に比べて小さいこと。柱穴の埋土が平安時代の遺物包含層である褐色砂質土の上層にあった褐色砂が多く混入していること。主軸の方向が他の建物よりも北に偏っていること。第1期～5期までの建物の大半は、建物の北端がほぼ一直線にならぶという規則性から逸脱していることなどから、この建物はやや時期が下ると考えられる。

また、柱穴の埋土から出土した遺物は細片であり、この掘立柱建物址の時期を決定する手掛かりは得られなかった。しかし、第Ⅳ章の基本層位の項で述べたように、柱穴の埋土内に多く混入していた褐色砂には、平安時代～鎌倉時代の遺物が若干包含されており、時期については定かではないが12世紀以降の遺物である可能性が強い。

以上見た通り、掘立柱建物址については、第1期～6期にわたることが判明した。これらの建物群の変遷を略述すると次のようになる。

第1期において存在していたのは、3間×3間の東西棟の建物1棟であったのに対し、第2・3期においては建物規模が大きくなり、棟数も増加していく。当時期のSB04, 07は、東西面闊の建物であり、また、地鎮遺構が伴う。この2棟が今回の調査範囲内で最も規模の大きな建物である。第4期には建物の規模がやや縮小するが、建物の方向性は以前と同様である。9世紀末～10世紀末段階に相当するのは、第2期～4期であり、この段階に頻繁に建て替えが行われているようある。

また、第1期～5期までの間は、建物の北端がほぼそろっており、その北側に、建物群と空閑地を画する東西方向の溝が存在している。この空閑地がどんな性格を持っているかは明確でないが、想像を逞しくするならば道路的な機能を有する空間と考えることも可能である。

第5期では、建物の方向性がやや失われた時期であり、第6期においては、前述のように、建物の北端がほぼそろっていた規則性から逸脱しており、以前とは全く異なる意図をもって、建物の位置を選定したものと考えられる。

掘立柱建物 址群の性格 について

9世紀末～11世紀にいたる掘立柱建物址群は、どの様な性格の建物であろうか。今回の調査では、これらの遺構の性格を知る直接の手掛かりは見い出しえなかつた。

前述した様に、当遺跡の建物は、ある一定の方向性、規則性を有しているが、これは、古代の官衙等の遺構でしばしば確認されるものである。

しかし、今回の調査では、木簡、墨書き器、陶器などの官衙関係の遺跡で比較的よく出土する遺物は全く発見されなかつた。また、文献上の記載も確認されなかつた。

ところが、地鎮遺構、遺物と考えられるものが、比較的狭い調査範囲内から6箇所も確認され、しかも、その遺構の内3箇所には、当時としてはそれほど流通していない皇朝錢を埋納していた点は注目される。それらの貨幣の入手が可能であったのは、一般的農漁民ではなく、やはり富裕な階層の人々であろう。

また、土鍤、鉢壺、鐵製品、鉄洋などの遺物も出土しており、これから、遺跡内には当地域で、ある程度の生産に従事した人々が生活していたとも考えられる。

地鎮遺構

調査地内からは6箇所の地鎮遺構が発見された。

その検出状況は第Ⅳ章すでに述べたが、出土遺物の組み合わせで、いくつかの形態に分類が可能であり、その多様性は注目に値する。

また、出土した地点は、建物の柱穴掘削内、建物の廂の真下、建物の内部（床下の可能性はある。）建物からやや離れた箇所など様々である。

出土遺物をみると、P-140、321、322で出土した土師器の杯（図38.№55,56,63,64）の4個体の内3個体までが、口縁部端に灯芯の痕跡があり、灯明皿として使用されている。このように、鎮物として埋納された土師器杯のほとんどに口縁部端に灯芯の痕跡があることから、地鎮の際の儀礼の一端が窺える。

8～10世紀にかけての地鎮遺構の出土例は、平城京内の発掘調査で、銭貨や水晶玉等が柱穴、土坑などから出土している。遺構については、その遺物の出土状況から柱穴を穿ち、柱を立てる際に埋納された立柱祭のものと、建物造営に先立ちもしくは建物竣工後に行う地鎮め供養に伴う鎮物埋納の2種類があるという。当遺跡では、P-26、140が前者、P-193、194、321、322の遺物が後者の供養による埋納物と考えられる。ただ、立柱祭に伴うものと推定される柱穴内への遺物埋納の位置は、平城京内ではほとんどが身舎隅の柱穴なのに対し、当遺跡では、廂部分のしかも隅でない柱穴に埋納している点は異なっている。

周辺地域
での地鎮
の類例

周辺地域においての鎮物出土の遺跡は、芦屋市・寺田遺跡³⁹、神戸市・上小名田遺跡等が挙げられる。芦屋市・寺田遺跡では、建物の柱穴埋土下層より、利同開卯が3枚貼りついた形で出土した。神戸市・上小名田遺跡では5間×8間の総柱建物の8箇所の柱穴掘形底から、乾元大寶が1～数枚ずつ出土した。

遺 物

平安時代の遺物包含層である褐色砂質土および同時代の遺構から、やや時期差があるが、多様な遺物が出土した。第V章の遺物の項で述べた様に土器類の中で実測可能であったのは、土師器が最も多く、次いで須恵器、黒色土器、縁・灰釉陶器の順になっている。

土 師 器

ここでは、比較的多く出土し、個体の形態差の大きい皿、杯類を中心述べていきたい。

皿については、小型のものと大型のものがある。小型のものでは、口縁部が「て」の字を呈するもの（図38.No42～49）があり、これらについても、口縁部が外反するものから、端部がほとんど立ち上がらない形態のものまである。「て」の字状の口縁部を持つ皿は、各地の10世紀代の遺跡から出土しているが、口縁部が外反するものは、10世紀中頃とされる平安京左京内講町SK19のものに近似している。また、端部がほとんど立ち上がらないものについては、10世紀末とされる奈良薬師寺SE048出土の遺物に似ている。また、SB07のP-26出土の皿（図38.No47～49）は延喜通寶（907年初鋤）を共伴しており、10世紀前半段階の遺物であると考えられる。

杯については、底部の形態より3種類に分類した。高台付のもの（図38.No50）については在地色の強い杯であるが、同様のものが神戸市神楽遺跡で出土している。

また、底部がへら切りで未調整なもの（図38.No54～56, 63, 64）についても、同形態のものが神戸市神楽遺跡SD02より出土している。報告書では、萬の遺物の形態的な差異を考慮して、古—10世紀中葉から後葉、新—10世紀後葉から11世紀初頭の2時期に遺物の時期を捉えている。その中で、底部がへら切りで未調整なもの（報告書では土師器杯A1b）については、（新）の段階に位置づけている。

今回の調査で検出された地鎮遺構P-322では、土師器鍋の中に寛平大寶（890年初鋤）を入れ、その上に上記と同形態の土師器杯を納めていたが、この貨幣が鉢物として埋納された時期を、鋤造からさほど時間が経過しない段階つまり9世紀末～10世紀初頭とするならば、この形態の杯はその時期にはすでに存在していたといえよう。

- 須恵器 壷蓋の端部の形態については、平城京において分類しているA、Bの両形態が存在する。壺身については、奈良時代の器形の系譜を引くもの(79)や、稜塊的な形態をとる杯(図39、No.81)がある。後者は10世紀中頃以降とされる加古川市札馬5号窯址から類似のものが出土している。また、前述の神戸市神楽遺跡でも同様のものが出土している。
- 塗(図40、No.86, 87, 93~96)鉢(図40、No.89~92)については、東播系須恵器とよばれるもので、11世紀末~12世紀後半のものと考えられる。
- 縫釉・灰釉陶器については、胎上が淡赤褐色で軟質のものと、灰色で硬質のものがある。前者については近江系、後者については、京都近郊で生産されたものであると推定される。
- 灰釉陶器は、出土量が少なく、小破片が確認されたのみであるが、猿投窯の製品であり、黒鉢90号窯式~折戸53号窯式の段階に比定される。
- 黒色土器 黒色化する範囲を、内面と口縁上端部に限定される「黒色土器A類」のみが出土している。これらの土器は、畿内中心部に見られる同様の「黒色土器A類」と比較して、内外面のヘラ削りの単位が荒く、器壁が厚いという様な、在地的色彩が強い土器である。同様の技法の遺物は前述の神楽遺跡で出土している。
- 土錘・蛸壺 今回の調査では、多種多様な形態の土錘が出土した。有溝土錘については、弥生時代に出現し、瀬戸内海を中心と分布している。棒状有孔土錘については、古墳・弥生時代の土錘として多く用いられるが、奈良・平安時代以降になると衰退する。環状土錘については、弥生時代以降用いられているものである。蛸壺は、古墳時代後期に倒鐘形のものが現れる。これらの形態によって時期を判断するのは難しいが、土錘・蛸壺は、平安時代の遺物包含層およびピットから出土したことから、他の出土遺物とほぼ同時期と考えてよいであろう。また、多様な土錘が出土したことから、当遺跡で各種の魚網が用いられたことは想像に難くない。
- 周辺の遺跡では、尼崎市金楽寺貝塚で多数の土錘・蛸壺が(時期は平安時代中期)出土している。
- 瓦 須恵質の平瓦が3点出土したがいずれも小破片であり、瓦當等の時期の判断できるものは確認されておらず、明確な時期は不明である。
4. 鎌倉・室町時代遺構 調査区の西半で河道跡S D 01が検出された。この河道跡については、平安時代の掘立柱建物址の柱穴のいくつかを削りとつて流れている。
- 堆積土中から古墳時代~室町時代の土器、陶磁器、石硯等が出土したが、鎌倉時代~室町時代の遺物が最も多かった。

- 遺 物 陶器、輸入陶磁器、須恵器、土師器、瓦器、石硯等が出土した。時期は鎌倉時代～室町時代（13世紀～14世紀）と考えられる。
5. 江戸・明治時代遺構遺物 鎌倉時代～室町時代に流れていた河道 S D 0 1 を利用して江戸時代後期に石組みの溝を造っている。堆積上中からは陶磁器、金属製品、銅錢（寛永通寶）、鉄砲玉等が出土している。
- S D 0 2 から出土した遺物は、江戸時代後期～明治時代前半までの時期のものであり、明治時代前半には S D 0 2 は機能を終えていたものと考えられる。
6. 結びにかえて 今回の調査で、特に注目すべき点を要約すると以下の通りである。
神戸市内では明らかでなかった布留式土器の最終段階期前後の堅穴住居址が確認されたこと。また、その埋土中から出土した比較的多量の土器により、摂津西部の当該時期の土師器の一様相が明らかになったこと。
平安時代後期～末期の掘立柱建物址が多数、検出されたこと。また、掘立柱建物築造時の地鎮祭を行った際に埋納したと思われる遺物が、6か所で確認されたことなどである。
- このたびの調査では、弥生時代中期～明治時代前期にかけての多種類の遺構、遺物が確認された。しかし、発掘調査した地点は、当遺跡のごく限られた部分であり、周辺に遺跡はさらに広がると推定される。今後の調査・研究によって、遺跡の全貌は明らかにされるであろう。

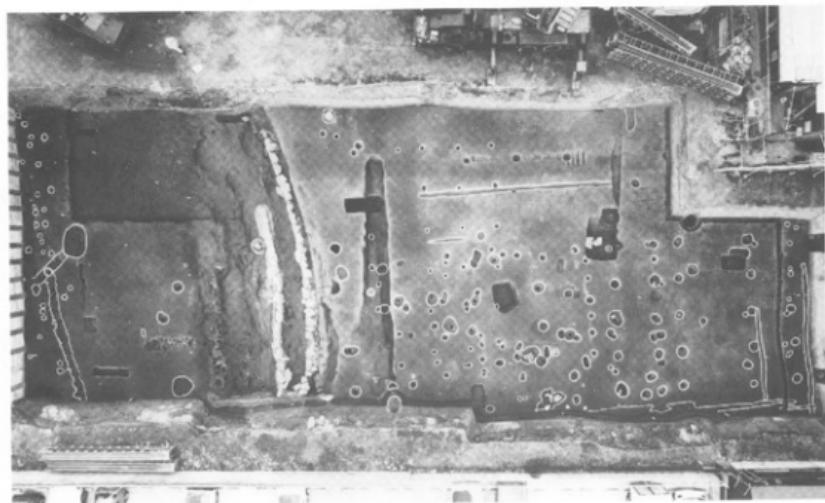
註

- (1) 『地下に眠る神戸の歴史展Ⅵ』パンフレット 神戸市教育委員会 1988
- (2) 『昭和58年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1986 なお有井地区については昭和61年度、神戸市教育委員会調査
- (3) 青山・片山遺跡調査団『青山南遺跡現地説明会資料』Ⅵ 1980
- (4) 『昭和60年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1988
- (5) 丹治康明「東播系須恵器について」『中近世土器の基礎研究』日本中世土器研究会 1985
森田稔「東播系中世須恵器生産の成立と展開—神出古窯址群を中心にして」『神戸市立博物館研究紀要』第3号 神戸市立博物館 1986
- (6) 山中敏史・佐藤興治『古代の役所』岩波書店 1985
- (7) 山口和雄『貨幣の語る日本の歴史』そして 1979
- (8) 田中哲雄他『平城京左京三条二坊三坪発掘調査報告』奈良国立文化財研究所 1984
- (9) (8)と同じ
- (10) 南博史他『芦屋市寺田遺跡発掘調査報告書』財団法人古代學協会 1980
- (11) 昭和63年度、神戸市教育委員会調査、また、神戸市住吉宮町遺跡（昭和63年度・第11次調査）では、3棟の掘立柱建物址（時期は平安時代前期）のうち、2棟の東南角に土師器壺と須恵器壺または土師器壺、壺を埋納した上坑が発見された。
- (12) 平良泰久他「平安京跡（左京内膳町）昭和54年度発掘調査概要」『埋蔵文化財調査概要（1980-3）』京都府教育委員会
- (13) 岡田英男他『薬師寺発掘調査報告』奈良国立文化財研究所 1987
- (14) 菅本宏明『神楽遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会 1981
- (15) (4)と同じ
- (16) 岡田英男他『平城宮発掘調査報告』Ⅺ 奈良国立文化財研究所 1982
- (17) 中村浩他『札馬古窯跡発掘調査報告書』加古川市教育委員会 1982
- (18) (5)と同じ
- (19) 百瀬正恒「平安時代の綠釉陶器—平安京近郊の生産窯について—」『中近世土器の基礎研究Ⅱ』日本中世土器研究会 1986
- (20) 楠崎彰一・斉藤孝正「猿投窯編年」の再検討について『愛知県陶磁資料館研究紀要』2 1983 また綠・灰釉陶器については神戸市立博物館、森山稔氏の御教示を得た。
- (21) 大野左千夫「有溝土鉢について」『古代学研究』86 古代学研究会 1978
- (22) 大野左千夫「有孔土鉢について」『古代学研究』93 古代学研究会 1980
- (23) 立石菜穂他『漁具の考古学 -さかなをとる-』堺市博物館 1987
- (24) (23)と同じ
- (25) 岡田務他『尼崎市金文寺貝塚Ⅱ』尼崎市教育委員会 1982

図 版

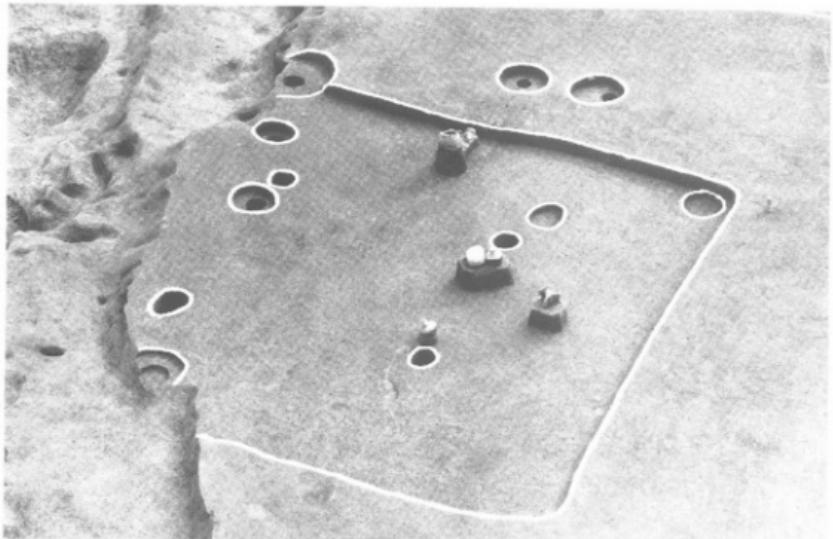


1. 古墳時代遺構面（北から）

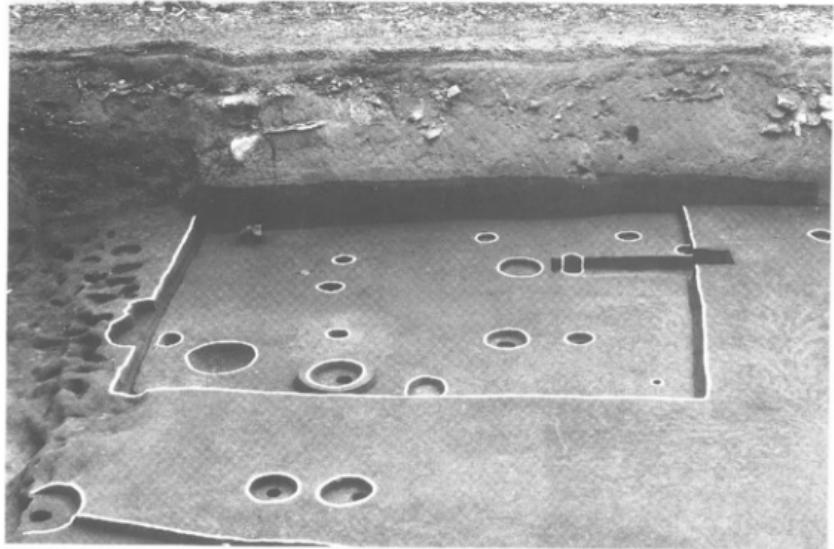


2. 平安時代遺構面

図版 2

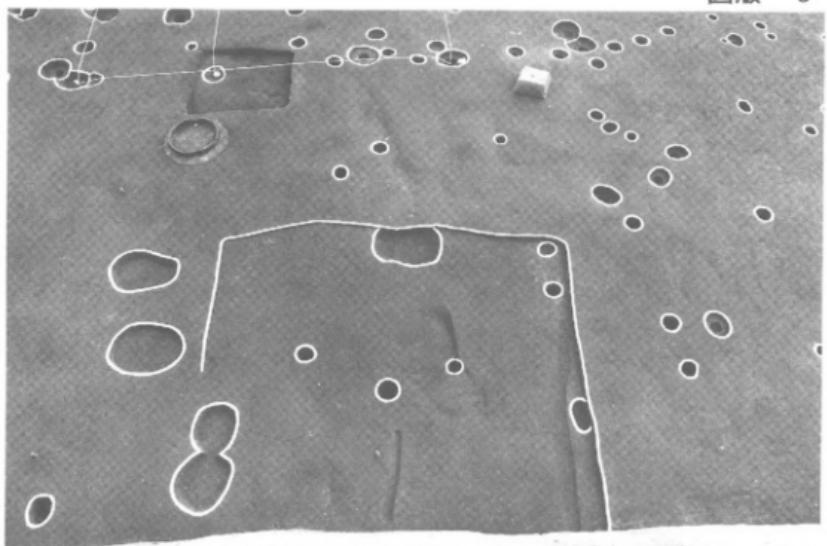


1. SB01 (北から)

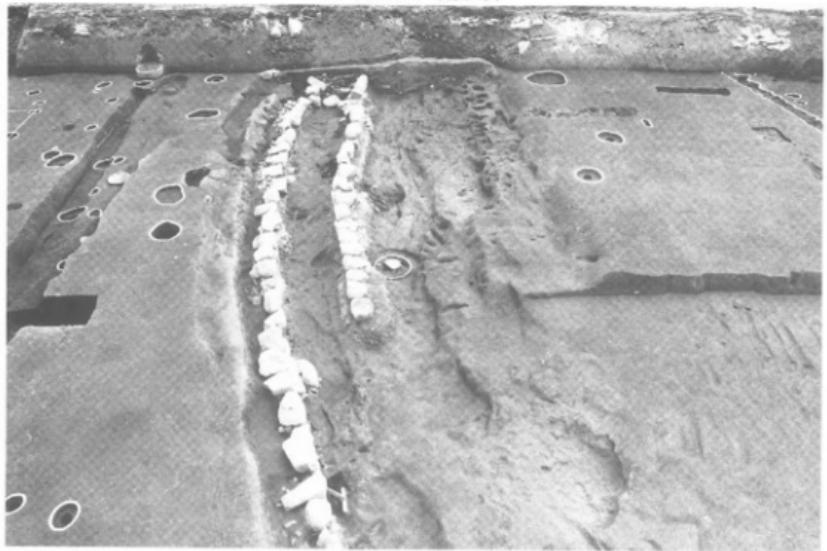


2. SB02 (北から)

図版 3

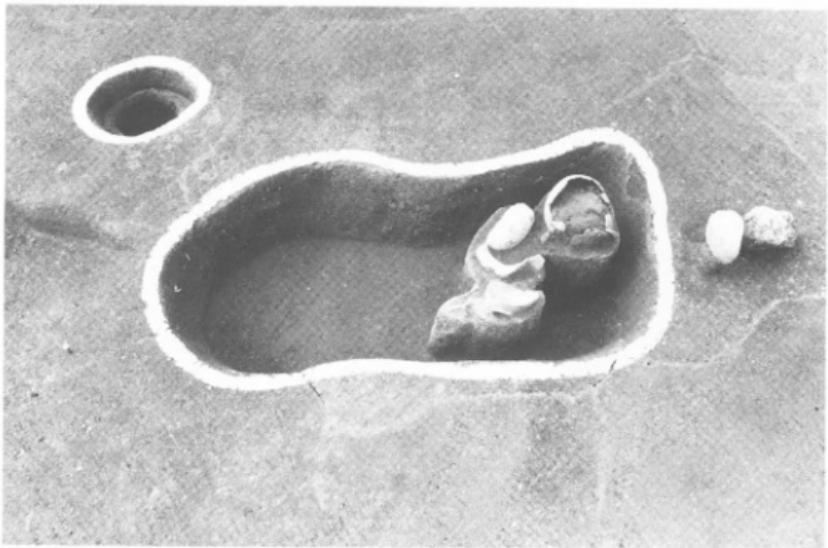


1. SX 01 (北から)

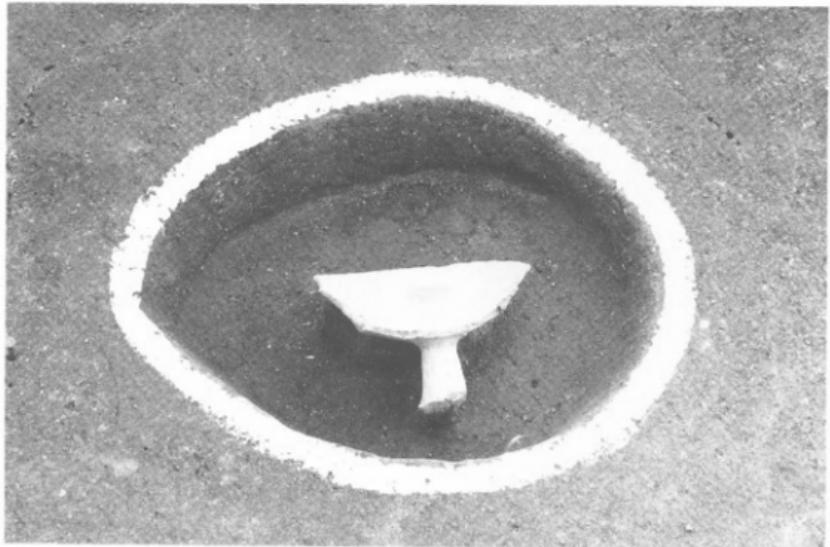


2. SD 01、02 (北から)

図版 4



1. SK01 遺物出土状況



2. P-111 遺物出土状況

図版 5



3



8



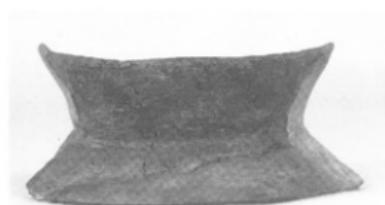
9



1



4



11



6

暗褐色砂質土、堅穴住居址出土土師器

図版 6



暗褐色砂質土、堅穴住居址出土土師器



18



29



16



26



30



27



34



36

暗褐色砂質土、竪穴住居址出土土師器、弥生土器

図版 8



67



56



65



55



63



64



66



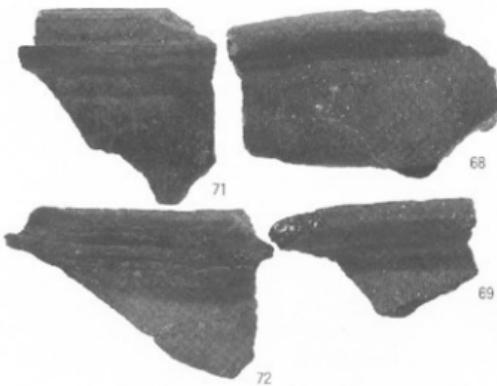
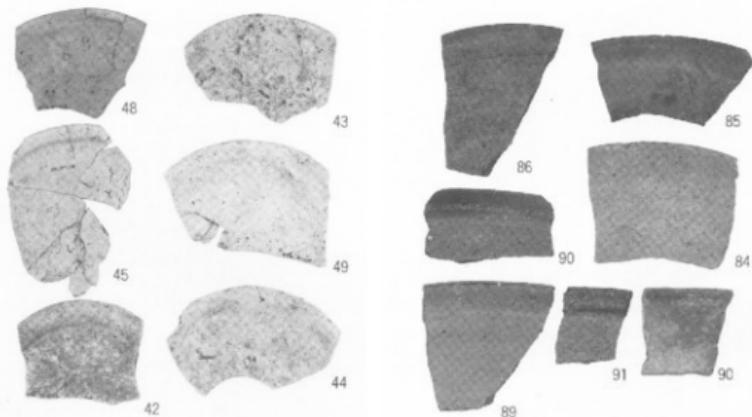
61



50

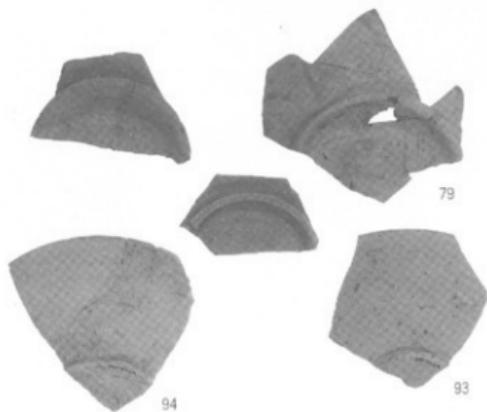
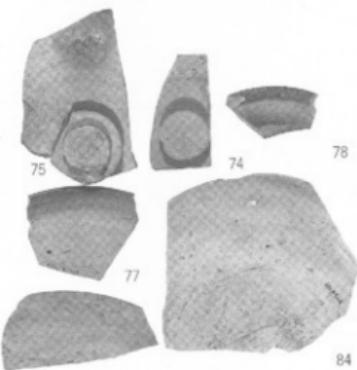
褐色砂質土、ピット、土坑出土土器

図版 9



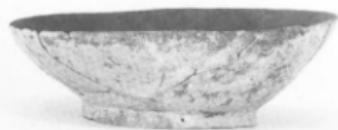
褐色砂質土、ピット、土坑出土土師器、須恵器

図版 10



褐色砂質土、ピット、土坑出土須恵器

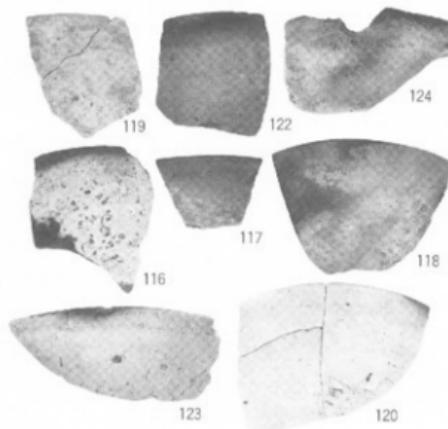
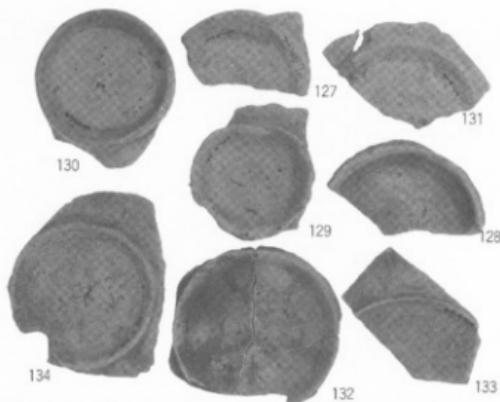
図版 11



121



125



褐色砂質土、ピット、土坑出土黒色土器

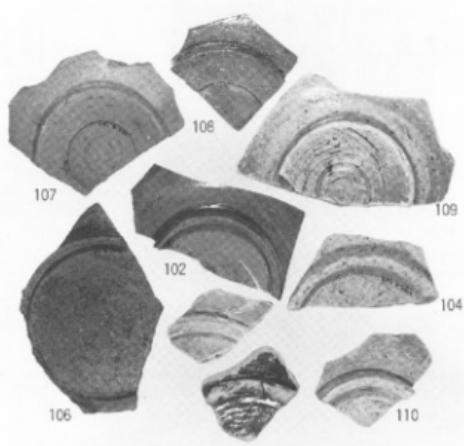
図版 12



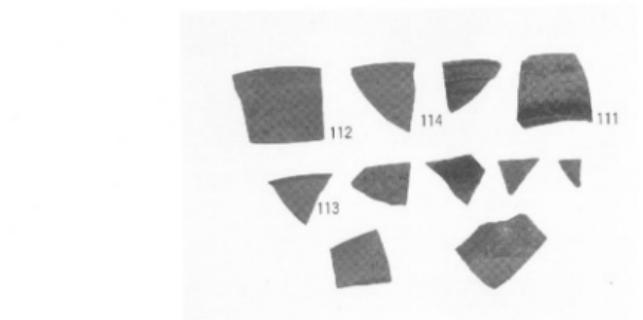
102



99



106



111

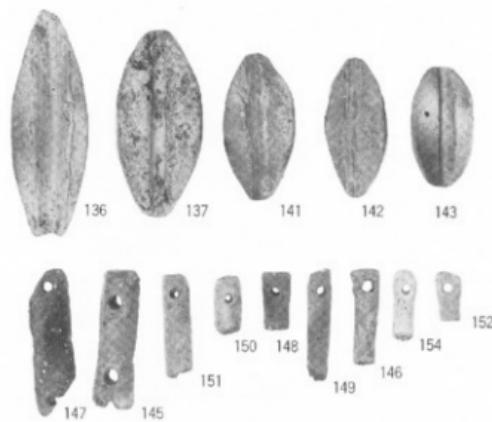
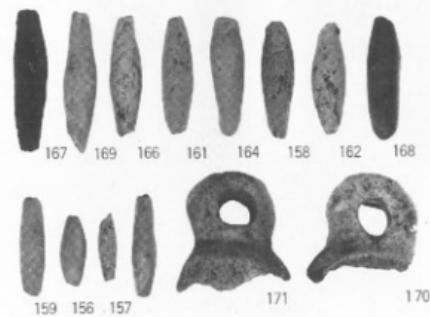
114

112

113

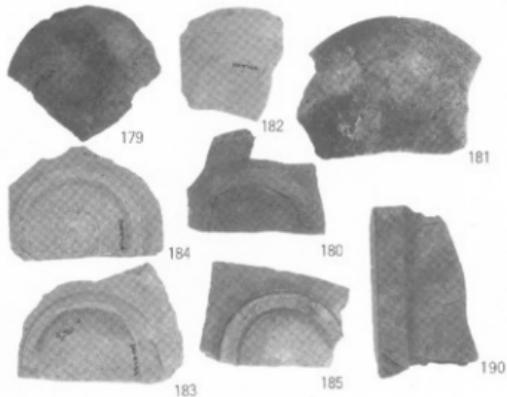
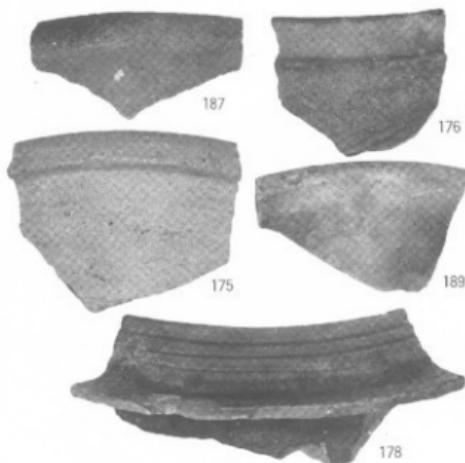
褐色砂質土、ピット、土坑出土縁・灰釉陶器

図版 13



褐色砂質土、ピット、溝出土土錘、蛸壺

図版 14



SD01出土土器、陶磁器、石硯



191



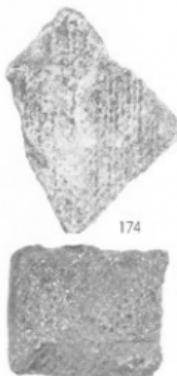
192



延喜通寶 S=1/1



172



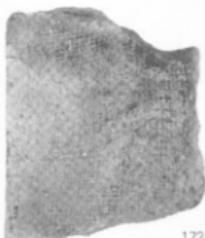
173



寛平大寶 S=1/1



銅 錢 S=1/1



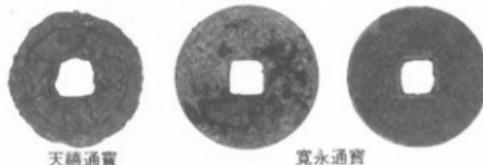
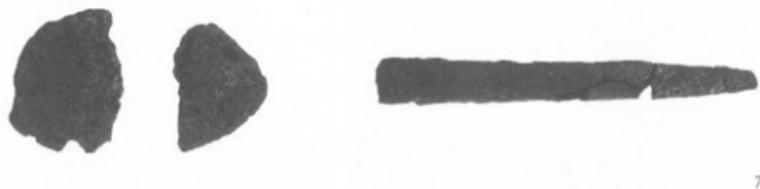
172



173

SD 0 2 出土陶磁器、褐色砂質土、ピット出土瓦、皇朝銭、銅錢

図版 16



褐色砂質土、ピット出土鉄製品、鉄滓、SD 01、02出土銅錢 S=1/2 (銅錢はS=1/1)

日暮遺跡発掘調査報告書

平成元年3月25日印刷

平成元年3月31日発行

発 行 神戸市教育委員会

神戸市中央区加納町6丁目5番1号

印 刷 大和出版印刷株式会社

神戸市中央区北本町通4丁目2番20号

神戸市広報印刷物登録 昭和63年度

第318号（広報印刷物規格A—6類）